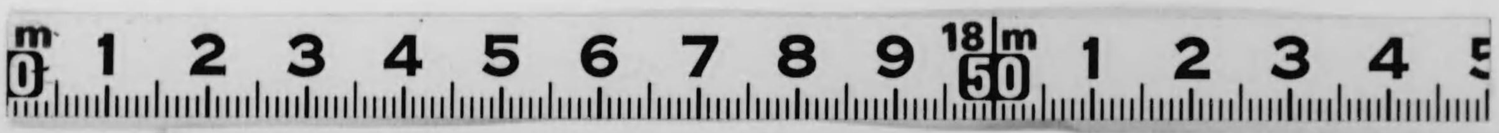

36
202

364-202

帝國圖書館藏

戲曲

狂藝人

吉井勇作

戲曲選集第七篇
（禁無斷與行）

大正
7. 2
内交

東京 春陽堂出版

內容

狂藝人
無賴漢

狂藝人

（三幕）

人物

俳諧亭句樂。（落語家）
おとし。（句樂の妹）
山崎新太郎。（文科大學生）
同信子。（新太郎の養母）
その他下男、煙草屋の女房等出づ。

おぎん。（小間使）
樫村虎彦。（新太郎の友達）
延美津。（清元の師匠）
おはつ。（稽古に來る娘）

場所

東京、淺草。

時代

現今。

第一幕

隅田川に臨める大いなる邸宅の一部。橋場附近。

新太郎の書齋と定められたる十疊の日本間、及び六疊の次の間。

上手の十疊の間は壁、六疊の間（觀客に近き方）は襖となりゐる。襖の彼方は直ちに土藏の入口となる。襖を開く時には黑き扉、太き格子戸など見ゆ。襖と土藏の入口との間の板壁に、二三個の燈籠を懸け、その下に赤き色の消火器あり。正面には障子。その向ふには廣き緣側を隔てて更に玻璃戸あり。障子を開く時は、その玻璃戸を通して隅田川の一部見ゆ。

下手の十疊の間は床の間と違ひ棚、六疊の間は襖。この襖よりすべての人々は出入す。

上手の壁に添ひて書棚あり。その前に川に向ひて紫檀の机を置く。書棚の外に床の間にも書籍雑誌等積み重ねあり。聚集せる種々の玩具は床の間にも書棚の上にも夥しく置き並べあり。壁には三四個の油絵の懸けられたる中に、古き役者の似顔絵なども交れり。

机の傍に桐の火鉢。縁側に竹の椅子。二月下旬の或る日の午前。曇りたる空は折々冷たき日光を洩らす。

（新太郎は机に向ひて頻りに筆を走らせゐる。二十三歳、年よりも若く見ゆ。美しき容貌。強度の近眼にて金縁の眼鏡を懸く。飛白の着物。筆を置いて溜息を吐き、傍の箱より巻煙草を取り、殆んど無意識にて火を附く。小間使おぎん下手の襖を開きて出づ。十七歳。美しき目を持てる圓顔の稍大柄なる女。その動作は屡々肉感的の刺戟を人に與ふ。熾れる炭を入れたる十能を持つ。）

おぎん。（火鉢の傍に来りて。）お火が消えましたでございませう。

新太郎。（目覺めたるが如く。）うん。まだあるよ。

おぎん。それでもこんなに消えかかつてをりますよ。（火箸を取りて。）まるで炭をお注ぎにならないんですもの——

新太郎。面倒臭いやね。それよりか早く書かなくちやならない仕事があるからな。（おぎんの頭に目を留めて。）おや、お前が島田に結つたのは、おれは始めて見るよ。

おぎん。頭なんぞご覽になつちやいけませんよ。

新太郎。お前には島田が一番好く似合ふね。これからいつもその頭に結つてゐると好いや。（回想する如き眼差をして。）あの晩には——

おぎん。（急に新太郎の言葉を遮りて。）およし遊ばせよ、そんなことをおつしやるのは。（火を注ぎ終りて。）そんなことをおつしやるなら私もうあつちへ往つてしまひますから。

新太郎。（わざと冷やかに。）ああ、あつちへ往きたけりやあ勝手にお出でよ。（間。）
何故あの晩のことを云つちやいけないのだい。
おぎん。それでも——
新太郎。それでも何さ。あの晩のことを云はれるのがお前は厭なのだらう。
おぎん。いいえ。
新太郎。それぢやあ闘はないぢやないか。（笑ひつつ。）しかし今おれが云はうと思つたことは、つまらないことなんだよ。あの晩お前がその頭に結つてゐたら猫嬉しかつたからうと思つたからそのことをお前に云はうと思つたのさ。
おぎん。まあ、そんなことをお考へになつたのでございますか。
（稍長き間。おぎんは感動して目に涙を浮べゐる。）
新太郎。おや、如何したんだい。泣いてゐるのかい。（おぎんに近寄り肩に手を懸く。）何か氣に障つたことでもおれが云つたのかい。（間。）默つてゐちや分らないよ。何とか返事をおしよ。
おぎん。（情熱の爲めに聲顫はせて。）ほんとに私——嬉しくつて嬉しくつて——
新太郎。（同じ程の情熱にて。）お前はそれ程嬉しいと思つて呉れるのかい。それぢやあお前はおれとこんな仲になつたのを別段後悔なんぞしてゐやしないのだね。
おぎん。ええ。しかしこれから先のことを考へますと、何だか悲しくなりますわ。
新太郎。如何して。
おぎん。あなたはここの跡取の方ぢやございませんか。如何して一所になんぞなれやしません。いづれお別れする時がまゐりますもの——
新太郎。そんなことはないよ。如何しても一所にならうと思へば、さうなれないと云ふことはないよ。
おぎん。（悲しげに頭を振る。）いいえ。私にはちやんと分つてをりますわ。お父う樣でもお母あ樣でもきつとお許しになりませんから——

新太郎。さうしたらおれはこの家を出てしまふだけだ。

おきん。（驚きと喜びと混じたる表情。）まあ——

新太郎。さうすれば一所になれるだらう。

おぎん。（放心したる如く。）ええ。

新太郎。（急に興奮して）。さあ、もう先のことなんぞ考へるのはおよしよ。（肩に懸けたる手おぎんの頰に觸る。）如何したんだい、お前の顏は。まるで火のやうに熱くなつてゐるよ。

おぎん。（うつとりとして。）若樣だつてきつと——

新太郎。若樣なんて云つちやいけないつて云つたぢやないか。（唇をおぎんの唇の近く寄せて。）もう外のことは考へつこなしだよ。

（二人は接吻す。稍長き間。下手の襖を開きて信子入り來る。四十五歲。細面の痩せ形の女。手に土藏の鍵を持つ。二人の何事も氣付かずに抱擁せる姿を見て驚きて立ち留まる。短き間。直ちに土藏の入口に往き、烈しく扉を開く響を立つ。）

新太郎。（おぎんより離れて。）おや、誰だらう。

おぎん。（信子を認めて。）まあ、奧樣——

（二人は顏を見合はす。その間に信子は土藏の中に入る。）

新太郎。（少し自棄らしく。）關やあしないよ。知れた方がかへつて都合の好いこともあるぢやないか。

おぎん。（落着かぬ樣子にて。）それでも私——

新太郎。（もどかしげに。）何だい。もつとはつきり云はなくつちや分らないよ。關はないから何でも思つてゐることを云つておしまひよ。

おぎん。（急に歔欷を始めて。）もしやお暇でも出るやうなことがあつたら、私何處へ往く所もございませんもの——

新太郎。好いよ、好いよ。心配しずにおるで。おれが悪いやうにはしないから――

（二度おぎんの傍へ寄り抱くやうにして。）さあ、もう泣くのはおよしよ。

おぎん。ええ。私もうあちらへまゐりますわ。

新太郎。ああ、それぢやあまた後でおるで。ほんとに何も心配することはないよ。

（おぎんは十能を携へて下手の襖へ入る。新太郎はその後を見送りゐたるが、急に氣付きて土藏の入口の方を凝視す。稍長き間。突然立ち上りて部屋の中を歩き廻る。やがて荒々しく障子を開けて縁側に出で椅子に腰を懸く。大いなる船の帆玻璃戸の前を過ぎゆく。

土藏の中より信子出で來る。極めて神經質なる顏付となりゐる。手に箱を携ふ。土藏の扉は開かれたるままなり。）

信子。（新太郎に近寄りて。）お前は今日も學校を休んだのかい。

新太郎。（慵うげに。）ええ。

信子。そんなに休んでも關はないのかねえ。もうお前が學校を忘け始めてから、かれこれ半年あまりになるよ。

新太郎。さうですかね。もうそんなになりますかねえ。

信子。夏休みからずつとなんだもの――あんまり長過ぎるぢやないか。（母親らしき態度にて。）體でも悪いのかい。

新太郎。（不快なる顏付。）さうですねえ。悪いと云へば悪いし、また悪くないと云へば悪くない――あんまり好くもありませんよ。（急に話頭を轉じて。）あのね、おつ母さん。僕はもうこの樣子では、とても家を繼げさうもありませんよ。

信子。（別段驚きもせずに。）如何してそんなことを云ふんです。何か譯でもあるのかい。

新太郎。（慰れむが如く信子を見る。）譯ですか――それはおつ母さんにはお分りになりますまいよ。唯僕が自然にこんな考を起すやうになつたと思つて下さればそ

れで好いのです。しかしこんなことはまだ申し上げまいと思つてゐたのですが、今日は丁度云ひ出す機會があつたやうに思ひましたから、つい申し上げてしまつたのでした。（興奮して椅子より立ち上る。）

信　子。（堪へ兼ねたる如く。）お前は今――（云ひ懸けて止む。）

新太郎。（歩み出さむとして立ち止まる。）何です。

信　子。（嚴肅に。）私の口からは何にも云ひません。また云へることでもありませんからね。（女らしい臆測をして。）何だね――てれ隠しにそんなことを云ひ出して――家を纒がないなんて――（脅かす如く。）待つておゐで。お父う樣にさう申し上げて來るから。

新太郎。（反抗的に。）ええ。何時までも待つてゐますよ。

（新太郎は机の前に座す。信子が下手に往き懸かる時、おぎん下手の襖を開きて出づ。二人は殆んど突き當らむとす。）

おぎん。（信子を見ておびゆる如く。）ああ、奥樣――ご免下さいまし。ついうつかりしてをりまして――

（信子は何とも答へずに下手へ入る。）

おぎん。（賴りなげに。）如何しませう。奥樣は怒つていらつしやるやうですわね。

新太郎。（いぢらしげにおぎんを見て。）心配しなくつても好いよ。おつ母さんは僕に對して怒つにゐるのだから――

おぎん。（心配さうに。）あなたに何かおつしやつたんですか。

新太郎。うゝん、何とも。（間。）あのことぢやないんだよ。まるで別のことなんだよ。

おぎん。（稍安心して。）さうでございますか。（急に氣付きて。）まあ、すつかり忘れてしまつて――あの樫村さんがいらつしやいました。こちらへお通し申しましてもよろしうございますか。

新太郎。（眉をひそめて。）うん。また醉つてゐやしないかい。

おぎん。いいえ。

新太郎。こつちへお通しよ。

（おぎんは座布團を火鉢の傍に敷き下手へ入る。大いなる船の帆再び玻璃戸の前を過ぎゆく。やや長き間。おぎんに導かれて樫村虎彦下手より出づ。二十五歳。同じく文科大學生。快活なれども何處となく鬱憂の影あり。色やや黑く短き口髭を生やす。制服。）

おぎん。（襖の所にて樫村に。）どうぞこちらへ。

（おぎんは直ちに下手に入る。）

樫　村。（新太郎を見て親しげに。）やあ——

新太郎。（無愛想に。）如何したんだ。まだ國へ歸らなかつたのかい。

樫　村。（座布團の上に無造作に胡座をかく。）うん。やつぱり東京にゐた方が面白いからなあ。

新太郎。相變らず飲み歩いてゐるのだらうな。それでも君は感心に講義だけは聽きに往つてゐるやうだね。

樫　村。それが近頃少し怪しくなつて來たんだよ。君は夏休みからずつと學校へ出ないんだな。身體の具合が惡いつて云つてゐたが、もうすつかり快くなつたかい。

新太郎。まだ駄目さ。かうやつてゐては到底快くなりつこはありやあしないよ。

樫　村。さうか。そりやあいけないな。（なつかしげに。）ほんとに暫らく會はなかつたなあ。何時だか一所に句樂を聽きに往つたきりだから、もうかれこれ二月になるよ。

新太郎。さうだね。句樂の氣狂ひが癒つてから席へ出ると云ふ始めての晩だつたね。僕はあの晩位句樂の話を聽いて變な心持ちになつたことはないよ。人形町の角で君と別れてから、僕は何處を如何歩いたかまるで分らないで、到頭家まで歩いて

歸つたのだよ。

樫　村。（不思議さうに。）何故そんなに變な心持になつたのだらうな。

新太郎。（少し興奮して。）そりやあ何故だか自分にも分らなかつたのだ。唯句樂の話を聽いてゐるうちに、何だか堪らなく悲しい心持になつたから、僕は無理に君を引つ張つて外へ出てしまつたのだ。（やや躊躇して。）實はあの前の晩にね——（云ひよどむ。）

（おぎん茶道具と菓子皿を持ちて下手より出づ。おぎんは茶を淹る。）

樫　村。（無意識に。）あの前の晩つて云ふと、君と二人で歌舞伎座へ云つた晩だぜ。毎日芝居ばかり見てゐる時分だつたからなあ。

（おぎんは或ることを直覺して顏を赧め、急ぎ下手へ入る。）

新太郎。（おぎんを目送しつつ。）さうだ。あの晩なのだ。（急に氣を變へて。）しかしこの話は止さう。くだらないことなんだから——

樫　村。（微笑して。）あんまりくだらなくもなささうだぜ、關はないから話したまへ。

新太郎。それなら話すがね。實は君にだけ相談しようと思つてゐたのだ。（稍羞恥を感じつつ。）僕は今或る女と關係してゐるのだが、それに就いていろいろ父やなんかに面倒な問題が起るだらうと思ふんだよ。それで君に相談したいと思ふのは——

樫　村。（突然。）それは何時頃からの話なんだい。

新太郎。それがあの君と句樂を聽きに往つた前の晩からのことなんだ。そんなことがあつたものだから、いつもなら何でもない句樂の話を聽いて、何だか氣が狂ひさうな心持になつたんだよ。（再び興奮して。）それからそんな心持が幾日も續いたのだ。毎日ぼんやり何にもしずに、まるで夢を見てゐるやうな時ばかり送つてゐたのだ。

樫　村。（同じやうに突然。）一體その女つて云ふのは誰なんだい。

新太郎。（少し狼狽して。）うん。まあそれだけは聽かずにゐてくれ。

樫　村。（無邪氣に。）當てて見ようか。（新太郎と目を見合はせて。）それはあのおぎんなんだらう。

新太郎。（ぎくりとして問ひ返す如く。）おぎん——

樫　村。うん。あのおぎんさ。あいつはなかなか別嬪だよ。如何だ。當つたらう。（快活に笑ふ。）

新太郎。（稍度を失ひし形にて。）全く君の想ひ通りだ。外の女ならまだ好いが、おぎんだから困つてゐるのだよ。何しろうちの小間使だからね。

樫　村。なあにそんなことは關やしないぢやないか。うちの小間使だから惚れちやいけないなんてことがあるかい。馬鹿なことを云つてゐるなあ。君にも似合はない。

新太郎。さう云へばさうだが、僕の父なんか實に頑固な分らず屋だからね。

樫　村。父なんてものはみんな頑固な分らず屋さ。粹な父なんてやつは、御維新以來ありやしないよ。（急に眞面目になりて。）それで君は僕に如何云ふことを相談したいと云ふのだい。

新太郎。君から父に云つて貰はうと思つたんだよ。

樫　村。何を——

新太郎。僕がおぎんと一所になることを許して呉れるやうに——

樫　村。（少し呆れて。）君はあの女と一所になる氣なのかい。（嘲けるが如く。）何だ。僕はまた君の相談と云ふのは、あの女と手を切るには如何したら好いだらうと云ふやうな事かと思つてゐたのだよ。

新太郎。（やや反抗的に。）僕にはそんなことは出來ないよ。

樫　村。何故——

新太郎。（急に感傷的になつて。）僕はあの女と別れてこんな家にゐるよりは、あの女と一所になつてこの家を出てしまひたいと思つてゐるのだ。

樫村。（云ふべき言葉に窮して。）さうかな。

新太郎。全く僕は近頃家にゐるのが厭で厭で堪らないのだよ。あの女とこんなになる前からも、僕はどの位家を出ようと思つたか知れやしない。こんな家を繼ぐよりも落語家にでもなつた方が餘つ程氣が利いてゐるよ。（間。）僕はもう學校も止めてしまふつもりなのだ。僕は何時までも無智でゐたいよ。さうして無智な女と一所になつて、一生寂しく暮らしてしまふのだ。

樫村。（きつぱりと。）そりやあいかんよ。そんなことをして如何するのだ。自分で自分を滅ぼすやうなものぢやないか。

新太郎。さうぢやない。それが僕の生きる唯ひとつの道なのだ。

樫村。如何して——（口早に。）小間使と一所になる。學校は止めてしまふ。家を飛び出す——それが何で君が生きる唯ひとつの道なのだい。

新太郎。（苛立たしげに。）もうこんなことを云ひ合ふのは止さう。到底分りつこはないのだから——（自棄の調子。）兎に角僕はあの女と別れたくないのだ。さうしてもう僕は此家にゐたくないのだ。

樫村。（笑つて。）問答無益つて形だね。また馬鹿に惚れてしまつたものだなあ。

新太郎。（沈鬱に。）もう止さうよ、この話は。

樫村。うん。（机の上の原稿紙に目を着けて。）何か書いてゐるのかい。

新太郎。（慌ただしく隠して。）何でもない。つまらない仕事を始めてゐるのだ。

樫村。（思ひ當りし樣子。）君は近頃小説を書いてゐると云ふ噂だがほんとかい。

新太郎。いいえ。小説なんぞ書きやあしないよ。

樫村。學校でみんながそんな噂をしてゐたぜ。誰だかその小説の梗概まで話してゐたやつがあつたつけ。何でも何樂のことを書いたものらしかつたよ。

新太郎。句樂のことを書いたものだつて――誰だらうな、そんなことを云つたのは。

樫村。誰だつたかな。（間。）ああ、君の所へは句樂はやつぱりちよいちよいやつて來るかい。

新太郎。うん、時々來るよ。

樫村。やつぱり元の家に住まつてゐるのかい。

新太郎。ああ、馬道八丁目さ。何時か君と一所に往つたことがあつたつけなあ。

樫村。氣狂ひはもうすつかり癒つたかね。

新太郎。もうすつかり快いやうだね。しかし相變らず譯の分らないことを饒舌つてばかりゐるよ。

樫村。（新太郎の顏を凝視しつつ。）君は近頃大分句樂にかぶれて來たね。考へることなんか大抵句樂が考へさうなことばかりだ。君は自分では分らないかも知れないが、僕にはちやんと分つてゐるよ。

新太郎。（考へて。）そんなことはないよ。

（おぎん下手より出づ。）

おぎん。（新太郎に。）あの句樂さんがまゐりましたよ。

新太郎。ああ、關はないからこつちへお通し。（樫村に。）やつて來たぜ、句樂が。

樫村。何か面白い話でもして聽かせないかな。

（おぎんはこの間に下手へ入る。）

新太郎。（机の上の葉書を取りて。）君はまた引つ越したんだね。瓦町だなんて洒落た所ぢやないか。

樫村。うん。あんまり洒落てもゐないよ。今度遊びにやつて來たまへ。久しぶりで一度飲まうよ。

新太郎。僕はまるで飲めなくなつたからなあ。

樫村。おや、おや、酒が飲めなくなつたとは頼もしくないやつだなあ。

（俳諧亭句樂下手より出づ。五十六歳。十五六日程前に剃りたる頭には短き白髪生え、髯も疎らに延びゐる。皮肉なる容貌。）

新太郎。（樫村に。）酒の飲めるやつがやつて來たが。この人なら頼もしいだらう。

句樂。何ですい、若旦那。不意打ちを食はしちやいけませんぜ。

樫村。何でもないんだよ、句樂さん。

句樂。さうですか。（新太郎に。）ご免下さいまし。（坐りて。）今日はね、あなた——何しろ雪模様で寒くつて堪らねえんでせう。一つ風呂を浴びて温まらうと思つて家を出たんですが、急に若旦那にお目に懸りたくなつてやつて來たんですよ。ご覽なさいまし。手拭と石鹸の箱を懐に入れたままさ。（懐より出して傍に置く。）

新太郎。相變らず飄然としてゐるね。

（おぎん下手より出で茶などつぎて入る。）

句樂。ねえ、若旦那。實は私に分らねえことがあるんですがね。昨夜からそれが氣になつて堪らねえんでさあ。それで今日あなたに伺つたら分るだらうと思つてやつて來たんですが——

新太郎。何だい、その分らないことつて云ふのは。

句樂。それがさ。全くつまらねえことなんですよ。（間。）私には人間つてものが何故生きてゐるんだか分らねえ。こいつが如何も昨夜から馬鹿に氣になつて仕方がねえんです。昨夜一晩寢ずに考へましたね。しかし如何しても分らねえ。

樫村。こいつは、句樂さん、大變なことを云ひ出したね。

新太郎。（笑つて。）それを聽きにおれの所へやつて來たのかい。そいつはおれにも分らないなあ。

句樂。さうですかね。私はこちらに伺つたら大抵分ると思つたんだが——（獨語する如く。）人間は何故生きてゐる——たつたこれだけのことなんだが、如何してもおれにやあ分らねえ。

新太郎。何だい。そんなことを考へてゐたつて仕方がないやね。何か近頃面白い話はないかい。

句樂。さうですなあ。あなたにはもう大抵話してしまつたからね。(煙草入を出して。)うん。あなたはまだこの話は知らないね。(煙草を吸ひつつ饒舌り續く。)ええと——昨日——一昨日——さき一昨日の晩の話さ。私は不思議な夢を見たんでさあ。まあ、その夢の話からしなくちや分らねえから、夢の話をちよつとしますがね。何でも始めは品川のお臺場らしいんですよ。私はたつた一人でぼんやり海を見ながら考へてゐるんだが、その考へてゐることがをかしいやね。外のことは何にも考へずに、唯酒が飲みてえとそればつかり考へてゐるのさ。こんな所にゐたつて仕方がねえから早く家へ歸りてえと思ふけれど一隻も舟が通らねえ。そのうち日がだんだん暮れて來やがつたから、こいつは困つたなあと思つてゐると、そこへ通り懸つた一隻の小舟がある。舟の中を見るとこいつが大變だ。若い男と女がたつた二人乘つてゐて、抱き合つたまま泣いてゐる樣子なんだね。はてな心中でもするんぢやねえかと思つたから聲を懸けると、ひよいと顏を上げた男が——若旦那、あなたなのさ。それからその舟に乘つていろいろ譯を聽いてみるとやつぱり心中をしに往くところだつたんだが、その女つて云ふのが面白い。それが死んだ田之助なんでさあ。何でもその舟を永代の橋袂に着けて、陸へ上つたと思つた時に夢が覺めてしまつたが、それからと云ふものは、如何もその夢が氣になつてならねえんです。それでまあ家にゐてもつまらねえからつて云ふんで、品川にゐる友達の所へ往つて見たが、少し話してゐるうちにそいつが、句樂さん、品川心中つて話があるが、今朝はそいつのほんものを見たぜつて云ふんでせう。何處でと聽くと私は全く驚きましたね。若い男と女とが抱き合つたまま死んでゐるのを乘せた舟が、崩れ臺場に流れ着いたんだつて云ふぢやありませんか。それからいろんなことを考へた揚句、人間は何故生きてゐるんだか分らねえと云ふこ

とになつたのさ。（突然立ち上りて。）さうだ。かうやつちやあるられねえ。若旦那、また伺ひます。

（句樂は煙草入を置き忘れたるまま下手へ入る。）

樫　村。まだ餘つ程をかしいね。

新太郎。（何ごとか考へてゐる。）うん。

樫　村。（時計を見る。）おや、十一時だ。僕はもう失敬するよ。

新太郎。さうか。まだ好いぢやないか。

樫　村。ちよつと家に來るやつがあるから。

新太郎。それぢやあ強ひて留めないよ。

樫　村。（微笑しつつ。）まあさつきの家を飛び出すなんて話はよく考へてからのことにした方が好いぜ。（立ち上る。）

新太郎。（立ち上りつつ。）うん。

（樫村は下手へ入る。新太郎も續いて下手へ入る。舞臺空虛。やや長き間。庭を掃く下男の姿玻璃戸のあなたに見ゆ。

信子とおぎん下手より出づ。おぎんは箱を持つ。二人は土藏の中に入る。新太郎下手より出づ。机の前に坐る。信子土藏より出で來る。おぎんも續く。）

信　子。（おぎんに鍵を渡して。）ちやんと閉めておゐで。（立ちたるまま。）新太郎——ちよつと——

新太郎。何です。何かご用ですか。

信　子。今來てゐた變な坊さんはありやあ何だい。近頃よく來るやうだけれど——

新太郎。ありやあ句樂つて落語家ですよ。

信　子。（驚きたる樣子。）落語家——まあ、如何してそんな藝人見たいなものと附き合ふのだね。

（おぎん土藏の扉を閉め、急に獻獻しつつ話を聽きゐる。）

新太郎。（信子の言葉には答へずに。）お父つさんはまだお歸りになりませんか。

信　子。もうお歸りになるだらうと思ふけれど――何か用があるのかい。

新太郎。ええ。ちよつと申し上げなくてはならないことがあるのです。

信　子。私で分ることなら今聽かうぢないか。

新太郎。さうですねえ。おつ母さんでも好い。（僅かに顏色を動かす。）實は私はお

ぎんと一所にして頂きたいと思ふんですが――

信　子。（冷笑する如く。）馬鹿なことをお云ひでない。あれはうちの小間使ぢやな

いか。

新太郎。そんなことは分つてゐますよ。しかし小間使だからいけないなんて、そん

な馬鹿なことはないでせう。

信　子。それもさうだけれど――しかしおぎんには今もう暇をやつたよ。さうして

直ぐに出て往くやうに云つて置いたよ。

新太郎。（冷やかに。）それが知何したんです。そんなことは何でもないぢやありま

せんか。おぎんが出て往けば僕も一所に出て往きます。

信　子。（呆れて。）まあ、何をお前は云ふのだい。よく氣を落ち着けて考へた上で、

お父う樣とも御相談したら好いだらう。

（信子はおぎんに氣付かずに下手へ入る。おぎんは直ちに新太郎の傍に來る。）

おぎん。（涙をこぼして。）急にお暇が出てしまひました。あのことが知れたからで

ございませうね。

（火鉢の傍に坐る。）

新太郎。そりやあさうだよ。そのことは何とも云はれなかつたかい。

おぎん。ええ。何とも――直ぐ出て往つて呉れつておつしやつたのでございますよ。

（縋るやうに。）私如何したら好うございませう。これからはもう今までのやうに

お目に懸ることは出來ないのでございませうね。

新太郎。（惑ひて。）さうだねえ。お前はこれから往く所つて云ふと、何時か話してゐた叔母さんの家しかないんだらう。

おぎん。私もうあの叔母の家へ往く氣はないのでございます。往つたところでろくなことはございませんもの——（急に聲を立てて泣き出す）。きつとお妾かなんかにされてしまひます。きつとさうです。

新太郎。（おぎんの傍へ擦り寄りて。）泣くのはおよし。もし誰か來るといけないから——

おぎん。ええ。だけど私何だか心細くつて仕方がございませんわ。これから先き如何なることやら——自分で自分の身の上が分らないのですもの——

新太郎。（興奮しつつ慰めて。）心配しずにおゐで。心配しずにおゐで。おれはお前のためにはどんなことでもするつもりだから——（おぎんの手を取る。）ね、これからどんなことがあつても、おれが附いてゐると思つて安心しておゐでよ。

おぎん。（頷きつつ涙を拭ふ。）ええ。

新太郎。（情熱をこめて。）しかしこれからはお前もずゐぶん苦勞しなくつてはならないと思ふよ。おれだつて今までのやうに呑氣にはしてゐられないだらう——ほんとに何時でも二人つきりでゐられる所へ往きたいね。さうして死ぬまでさう云ふ所でたつた二人で暮らしたいね。

おぎん。（喜ばしげに。）さう云ふことが出來たらほんとに嬉しうございますねえ。

新太郎。出來るも出來ないもないぢやないか。二人でさうしようと思へば、何時でも出來るよ。

おぎん。（恍惚として。）ほんとにさう云ふことが出來ませうか。

新太郎。（おぎんの手を堅く握り締めて。）ああ、出來るとも——おれはもうお前がゐなくなれば家にはゐないよ。二人で何處かに家を持たうよ。ね、お前とおれとたつた二人で——（おぎんを引き寄せて。）厭かい——厭ぢやないだらう——さあ

何とか返事をおしな。

おぎん。（新太郎に靠れ懸りて。）私もう――さうなりやあ死んでも關ひませんわ――

（二人は接吻す。長き間。）

新太郎。（醉へるが如く。）さあ、如何しようね。これから――

おぎん。（半目を閉ぢたるまま。）私は如何ともあなたのおつしやる通りになりますわ。

新太郎。（おぎんの傍を離れて机の前に來る。）それぢやあね。おれが手紙を書いてやるから、句樂の家へ往つてゐないか。

おぎん。（稍不安を感じて。）まあ、あんな人の所へ――

新太郎。さうすりやあ直ぐ後からおれも往くよ。

おぎん。あなたが直に來て下さるなら好うございますけれど――ほんとに直ぐ來て下さいますか。

新太郎。ああ、直ぐ往くとも。（机に向ひて。）ちよつとお待ち。今手紙を書いてやるから――（手紙を書く。）

おぎん。（傍より。）あの人の家はたしか馬道でございましたね。

新太郎。ああ、大抵分るだらう。番地を聽いて往けば――

おぎん。ええ。しかしなるべく早く來て下さいましな。

新太郎。大丈夫だよ。安心しておゐでよ。（書き終りて。）さあ、これを持つておゐで。（手紙をおぎんに渡す。）

おぎん。（急に悲しげに。）何だか今お別れしてしまふと、もうお目に懸れないやうな氣がして、急に情なくなつてまゐりましたわ。（寂しげに笑つて。）全く私は馬鹿でございますわねえ。こんなつまらないことを考へるなんて――

新太郎。（同じ心持の中へ引き込まれて。）何だかかうなると悲しいやうな氣もするね。（やはり寂しげに笑つて。）しかしこれからは嬉しいことばかりだから好い。

おれはお前と一所にゐられるなら、何もかもみんな棄ててしまつても關はないよ。家も、財産も、親も、友達も――

おぎん。（新太郎の傍に寄つて。）どうぞ見棄てないで――何時までも――何時までも――（頰は新太郎の頰に近づく。）

新太郎。（おぎんを抱き締めて。）お前もだよ――お前もだよ――（熱して。）もう如何なつたつて關やあしない。お前のためなら死んでも好い。

おぎん。（喘ぐ如く。）私も――私も――

（二人は再び接吻す。おぎんの帶に挾みし土藏の鍵突然疊の上に落つ。二人離る。）

新太郎。何だい。

おぎん。（鍵を拾ひ上げて。）奥樣からお預り申した土藏の鍵でございますよ。

新太郎。何だ、そんなものは何處かそこいらに投り出して置けば澤山だ。（句樂の忘れ置きし煙草入を指差す。）それよりも句樂が忘れて往つたその煙草入を、早く持つて往つて渡しておやりよ。

（おぎんは立ちて煙草入を取り上ぐ。二人は顏を見合はせて寂しげに笑ふ。玻璃戸の彼方を大いなる船の帆續いて過ぎゆく。靜かに幕。）

第二幕

淺草馬道の路次の奥にある句樂の家。

上手に句樂の家あり。路次は上手に通ずるものと、正面の奥に通ずるものと二つありて、句樂の家の前にて相交る。路次と路次との間に長屋の一部現はる。句樂の家と向ひ合ひて淸元の師匠延美津の家あり。

句樂の家は、路次に向ひて格子戸あり。極めて狹き土間。格子戸と並びて（觀

客より遠き方）臺所の障子。六疊と三疊の二間。正面は壁と押入。壁の前に本箱二個。その蓋には「軍書」及び「俳書」と記す。押入の前には芝居の番附などを貼りたる古き枕屏風あり。柱には發句を書きたる短冊を懸く。上手は障子。その外には狹き空地ありて壞れたる箱庭植木鉢など散亂す。

第一幕と同じ日の午後三時頃。雪を催したる空模樣。

（句樂は褞袍を着て安火に當りつつ、しきりに句を案じゐる。傍に硯箱煙草盆などあり。時々獨語しては紙に句を書き付く。延美津の家よりは三味線の音聽ゆ。）

句　樂。（筆を取り上げて。）ええと——道樂に身を持ちくづす春の風——（首を傾けて。）如何も何だか落ち着かねえな。成程こいつあ句樂が作りさうな句だと思はれなくつちやあつまらねえからなあ。（筆を置いて。）道樂だけを生かして置いて——道樂を——道樂をみなしつくして——ぢやあ秋の風だなあ。（錆びたる聲にて笑ふ。）

おとしの聲。（臺所より。）何を一人で笑つてゐるんだい。氣味の惡い——

句　樂。默つてろい。今名句が出來さうなんぢやねえか。（再び筆を取り上げて。）ええと——道樂を人のほむるや春の風——（喜ばしげに。）うめへ、うめへ、こいつあ名句だ。（紙にその句を書き付く。）

おとしの聲。兄さん。兄さん。

句　樂。（慵うげに。）何でえ。

おとしの聲。さつき兄さんが留守のうちにね、お向ふの延美津さんの家で大騷ぎがあつたんだよ。

句　樂。（急に顏を上げて。）さうか。如何したのよ。（氣配はしげに。）ええ、おとし。一體その騷ぎつて云ふのは如何したのよ。

（おとし下手の障子を開きて出づ。三十四歲。女郎上りの女。殆んど絕間なく悲

しげなる表情のみすれども、時々嘲ける如く笑ふことあり。袢纏。前垂。）

おとし。（句樂の前に座りて。）さうねえ。兄さんが出て往つてから間もなくのことなんだよ。家の前を變な田舍者らしい男がうろうろしてゐたが、延美津さんの聲をじつと聽いてゐるやうな樣子なんだよ。さうだ。丁度煙草屋のおはつつて娘が書つてゐる時だつたよ。私も變な奴だと思つてゐるうちに、そいつがいきなり格子を開けて延美津さんの家へ飛び込んで往つたものなのさ。

句樂。ふうん、何でゐ、そいつは。

おとし。何だかいまだに分らないんだよ。何でも話の樣子では、延美津さんが北海道で藝者をしてゐた時分に、世話にでもなつた男らしいのだが、それにしてもひどい姿をしてゐるのさ。きつと好い所の息子だつたのが零落れてあんなになつたのだと私は思ふよ。

句樂。さうしてそれからどんな騷ぎがあつたんだ。

おとし。何だが知らないが、いきなり延美津さんを蹴倒しでもしたらしいのだね、家の中がまるで引つくり返るやうな騷ぎなんだらう。私はもう延美津さんは殺されでもしたことゝ思つたの。（安火に手を溫めつつ。）ほんとに怖かつたよ。兄さん。

句樂。（熱心に。）それから如何したのよ。

おとし。それからばつたり靜かになつてしまつたが、おはつちやんが眞つ青な顏をして出て來たから、如何したんだつて聽いたけれど、默つてゐて如何しても話をしないのだよ。

句樂。しかしもうああやつて稽古をしてゐるぢやねえか。

おとし。ああ、自分ぢやあ何とも思つてゐないのかも知れないよ。

句樂。その男は如何したい。

おとし。何處かへ往つてしまつたやうだつたよ。さんざんいろんなことを云つてゐ

たやうだつたけれど――（句樂の顏を見て笑ふ。）厭だよ、兄さんは。お前延美津さんに惚れてゐるんだね。

句　樂。（少し狼狽して。）笑談云つちやいけねえ。そんなこたああありやしねえよ。

おとし。（嘲ける如く笑ふ。）惚れてゐるなら取り持つて上げやうか。

句　樂。（眞面目。）馬鹿あ云ふねえ。（間。）しかし、おとし、あの延美津さんは死んだ紫君によく似てゐるぜ。

おとし。（氣味惡げに。）さうかい。

句　樂。（悲しげに。）もう紫君が死んでから三年になるなあ。（稍狂ほしき調子にて。）あいつの所へは三年も通つたんだ。煩ひ付いてたつた二晩で死んぢまつたんだから、夢のやうな氣がするのも無理はねえだらう。しかし如何しても忘れられねえよ。今でもまだ生きてゐるやうな氣がして、ふらふらと家を出懸けたくなることがあるからなあ。

おとし。（わざと戲れの如く。）兄さん。昔の情婦ののろけなんざあおよしよ。

（三味線の音止む。おぎん正面の路次より出づ。着物を着替へ、風呂敷包を持つ。逡巡して佇みゐる。）

句　樂。（寒さうに身顫ひをして。）三味線の音が止むと急にひつそりしてしまひやがるな。如何もくさくさして氣が滅入つていけねえ。おとし、まだ酒を飲んぢやいけねえかな。

おとし。いけないよ。また病氣が起ると大變ぢやないか。それにお錢だつてありやあしないよ。

句　樂。さうよなあ、席を休んでから半月になるからなあ。病院を出てから十日つきや稼がねえ。

（句樂は安火に寄り懸りて考へ込む。延美津の家よりおはつ出で來る。十五位の娘。）

おぎん。（おはつに。）句樂さんて人のお宅はこのご近所でございますか。

おはつ。（不思議さうにおぎんを見て。）句樂つて落語家でせう。

おぎん。ええ。さうですよ。

おはつ。それぢやあそこの家ですよ。（句樂の家を指す。）

おぎん。ああ、さうですか。如何も難有う。

（おはつは正面の路次へ入る。おぎんは句樂の家の前に立つ。）

おぎん。ご免下さいまし。

おとし。（聽き付けて。）どなた——（立ちて障子を開く。）

おぎん。（極り惡げに。）あの——この手紙を持つてまゐりましたが——（手紙をおとしに渡す。）

おとし。手紙を——あなたはどなたで——

句樂。何でえ、手紙か。早く見せろよ。（おとしより手紙を受取りて。）何だ。山崎さんの若旦那からなんぢやねえか。（開きて讀む。）

おとし。（おぎんに。）まあ、どうぞお入りなさいましよ。

おぎん。（ためらひて。）ええ——

句樂。（快活に笑ふ。）こいつあ洒落れてゐらあ。（おぎんに。）まあ、どうぞこつちへお上んなさい。（おとしに。）おい、おとし。ぼんやり立つてゐずに、何とか言つて上げねえな。

おぎん。いいえ。もう私はここで澤山でございます。

句樂。笑談云つちやいけねえ。この寒空にそんなところに何時まで立つてゐられるものぢやあねえ。

おとし。さあ、どうぞこつちへお上んなさいましよ。

（おぎんは家の中に入りて座敷の片隅に坐る。句樂は喜ばしげにおぎんの姿を眺む。）

句樂。（半ばおぎんに、半は獨語の如く。）さぞ嬉しいだらうなあ。おれも昔こんなことがあつたが、今でも時々思ひ出すよ。やつぱりこんな雪もよひの日だつけ——家を逃げ出して、女と一所に長崎三界まで往つたのだが——あれから二人でずゐぶん苦勞をしたつけなあ。

おとし。兄さん。何を云つてゐるんだね。

句樂。おれはこんなことに出會はすと嬉しくて堪らねえのだ。

おとし。（訝しげに。）こんなことつて——

句樂。うん、お前にはまだ話さなかつたな。若旦那から女と二人何處かに匿まつて置いて呉れつてお頼みなのよ。好い氣持ぢやねえか。惚れた若い者同志を見てゐると、おれはもう堪らなく嬉しくなるね。なあ、おとし。何處かに二階でも貸す家はねえかな。

おとし。だつてそんなことがお宅へ知れたら大變だらう。

句樂。なあに闘ふものかな。惚れた同志で一所になるのに何も不思議なことあねえぢやねえか。何處かこの近所を聽いて見て呉れねえか。

おとし。ああ。

（おとしは不性無性に勝手より出てゆく。殆んど同時に延美津出で來る。三十歳位。寥艶なる女。頰に傷痕あり。二人顔を見合はせて挨拶す。）

延美津。如何も先き程は——あんな馬鹿がやつて來たものですから。

おとし。それでも怪我なんぞしなくつて好かつたわね。何處へ往くの。

延美津。聖天樣へお詣りに往かうと思つてゐるの。そこまで一所に往きませう。

おとし。聖天樣ならこつちの方が近いでせう。

（雪降り出づ。）

延美津。おや、到頭降り出して來た。

おとし。そんなにひどいことはないだらうけれど——兎に角傘がなくちややりきれ

ない。

（二人は傘を取りに家に戻り、何ごとか呟き合ひながら下手の路次へ入る。この間におぎんは風呂敷包の中より句樂の置き忘れたる煙草入を取り出す。句樂は延美津の聲の聽えずなると同時に、じつと悲しげに考へ込み何ごとか思ひ出しゐる樣子。）

おぎん。句樂さん。これがさつき置き忘れてあつたのでございますよ。

句　樂。（顏を上げて。）ええ、何ですつて——（氣が付く。）ああ、如何もこれは——

おぎん。（心配さうに。）もういらつしやりさうなもんですがねえ。

句　樂。何も心配しなさるこたありませんよ。もうぢきおゐでになるでせう。（感傷的になつて。）何もそんなに心細がらなくつても好いやね。そりやあさうやつて一人で待つてゐる間と云ふものは、ずゐぶん情ないやうな氣もするだらうが、それがまた樂しみなものさ。おれのやうな年になつちやあもうそんな心持になれやしねえ。たとへ惚れた女があつてものことだ。昔の女に似てゐるとか何とか云つて、やつぱり昔の夢を繰り返へさうとするのが、せめてもの樂しみなのだからなあ。

おぎん。（何の氣なしに。）昔の夢つてどんな夢——

句　樂。（この言葉を聽いて喜ばしげに。）そんなことを聽いて呉れるやつは、今日まで一人だつてありやあしねえ。おれは嬉しいよ、おぎんさん。ほんとに、嬉しい——堪らなく嬉しいや。（涙をこぼして。）お前さんはおれの昔の夢の話を聽いて呉れるかい。

おぎん。ええ、聽くわ。話して下さいな。（急に驚いて。）まあ、泣いてゐるのね。

句　樂。（突然笑ひ出して。）ははは、昔の夢はどんな夢か。しかし待てよ。よく思ひ出さなくつちや分らねえぞ。（沈默して考へ込む。）さうだ。やつぱり始めは藥研堀の質屋の妾が殺された晩のことからだな。

おぎん。（氣味惡けに。）何なの、一體その話。

句樂。まあ默つて聽いてゐねえ。（怖ろしげに。）因緣と云ふものは怖ろしいものだぜ。その妾つて云ふのが、おれの眞實のおつ母さんで、おれが十四の時に殺されてしまつたんだが、それにもう一人娘があつて、それが後で烏追お松になるのよ。（考へて。）少し變だな。いけねえ、いけねえ。さうぢやねえ。何だ、それ——紫君がまだ店へ出たばつかりのことなんだ。

（句樂は最後の言葉を云ひ終りてより、ぼんやり何處となく凝視しゐる。沈默。おぎんは驚きて句樂の顏を見る。）

おぎん。もう好いわ、昔の夢の話は。

句樂。（悲しげに。）もう昔の夢の話も忘れてしまつたよ。やつぱり山崎の若旦那位の時分だらう。もうかれこれ三十年も前のことだらうなあ。おれは今までに駈落を三度したが、忘れられねえのはその中の一度だけだな。それが昔の夢の話なんだが、今日はもう話すのは止さうよ。聽いて吳れるのは嬉しいが、如何もまだすつかり思ひ出されなくつていけねえ。まだからだが惡いのかなあ。

おぎん。關はないから横になつてお寢みなさいよ。

句樂。なあに寢るにも及ばねえよ。

（新太郎正面の路次より出づ。外套。中折。句樂の家の前に來る。）

新太郎。（格子戸を無造作に開きて。）句樂さんは家かい。

句樂。若旦那ですか。さあ、お上んなさい。さつきからお待ち兼ねですぜ。

新太郎。（座敷に上る。）如何も飛んだことを賴んぢやつて——

句樂。なあに飛んだことどころか——早速おとしを搜しにやりましたがね。二階か何かの方か好いだらうと思つて、さう云ふことにして置きました。

新太郎。（坐る。）そりやあ如何も難有う。（寂しげな調子。）しかしね、句樂さん。かうなつて見ると、おれも到頭君達のお仲間入りをしたやうな氣がして、何だか

寂しいやうな心持もするよ。

句樂。（新太郎の言葉の意味がよく分らずに。）私達の仲間つて——

新太郎。世間から見離された人達さ。さうしてまたこつちから世間を見離した人達さ。

句樂。（笑つて。）私なんぞはもつとひでえや。世間なんてまるでねえもんと思つてゐるんだからね。結句その方が幸福さね。

新太郎。お前でも幸福なんてことを考へるかい。

句樂。そりやあ考へまさあね。だがね、若旦那。幸福なんてものは悪い酒のやうなものですぜ。醉つてゐる間は好い心持だが、覺めた後ぢやあきつと頭が痛みまさあ。

（二人は笑ふ。雪は次第に烈しくなる。）

新太郎。句樂さん。今日はまるで酒の氣がなささうだね。

句　ええ、飲みてえんですが、席を休んでゐるものですから——

新太郎。おい、おぎん。ちよつと酒を買つて來て呉れないか。（おぎんに金を渡す。）

おぎん。酒屋は何處にあるんでせう。

句樂。なあにもうおとしが歸つて來ますからあいつを使ひにやりませうよ。

おぎん。いいえ。私が往つて來ますからよござんすよ。

句樂。さうですか。そいつは恐れ入りますな。酒屋はこの路次を出ると眞ぐ向ふ側ですよ。

新太郎。（おぎんに。）おれの傘がそこにあるよ。

（おぎんは下手の路次へ入る。）

新太郎。句樂さん。何時だかお前の云つてゐた通り、到頭家を飛び出すことになつてしまつたよ。

句樂。いや、全く好いことをしましたよ。若いうちに一度位家を飛び出さないや

うな男は駄目ですよ。家を飛び出してご覽なさい。これからはあなたの自由ぢやありませんか。しかしお宅ぢやさぞ驚いておるでせうな。

新太郎。　さうでもあるまいよ。結句好いことにしてゐるのかも知れない。（句樂の顏を凝視す。）句樂さん。一體お前のあの病氣は、もうすつかり快くなつたのかい。

句　樂。（ぎつくりして。）ええ、もう大抵快くなつたと思ひますがね。しかし時々頭の中に泥が一杯詰まつてゐるやうな心持のすることがありますよ。

新太郎。　何時だつけかなあ。あの病氣が起つたのは。

句　樂。　さうさね。去年の春時分から餘つ程怪しかつたのだが、ほんとに悪くなつたのは八月の末でしたかな。丁度その時は若竹に出てゐて、それから兩國の立花へ廻らなけりやあならなかつたのでしたが、電車に乘つてゆく途中で――さうさ、須田町を出て間もなくのことでしたよ――ふいと私の隣を見ると、死んだと思つた紫君が腰を懸けてゐるぢやありませんか。（急に話を止めて。）この話はもうあなたには話してしまひましたかね。

新太郎。　いいえ。まだ聽かないよ。紫君の話だけは聽いたけれど――

句　樂。　それぢやあまあ聽いて下さいまし。（殆んど呼吸も吐かずに話す。）それでもうその時は餘つ程如何かしてゐたのですね。紫君が死んだつてことは氣が付きません。會つたのが嬉しくつて、お前は何處へ往くんだつて云ふと、あなたの後を追つ懸けて來たつて云ふんでせう。それなら電車の中で話も出來ねえから、何處かで酒でも飲みながら話さうと云ふので、淺草橋あたりで電車を降りたとお思ひなせえ。誰もゐやしねえんだが、こつちは女と一所に歩いてゐる氣ですから、句樂だつて情婦を連れて歩くことはあらあつて顏付をして、如何でえ久しく會はなかつたな、病氣だつて話だがもうすつかり快いのかなんて云ひながら、何でも廣小路の近所の鳥屋へ上つたんですよ。さうして酒を飲まうとすると杯が一つしかない。姉さんお客は二人だぜつて云ふと、ご笑談をつて云つたつきりまるで相

手にしませんや。仕方がねえから一つの杯を遣り取りして――その實一人で飲んでゐるんですが――いろんなことを話してゐる。これだつて一人で何か饒舌つてゐたんですね。もうかうなると女中も何も出て來やしません。そいつがね、今考へて見てもをかしいのは、私の前に坐つてゐる紫君の姿つてものが、すつかり華魁の姿をしてゐるんでせう。頭を紫天神か何かに結つて、褄襠を着てゐるんだから面白いやね。

新太郎。つまりそんな幻が見えたんだね。

句樂。（眞面目に。）いいえ、幻ぢやあねえんです。たしかにそこにゐたんですからな。それから家へ歸つて來てふいと傍を見ると今までゐたと思つた紫君の姿が見えねえんでせう。私はその時程がつかりしたことはありませんね。それから家を飛び出して、吉原へ往つて見るともう大引け過ぎです。蓬萊屋を敲き起して紫君に會はせろつて云つて聽かなかつたさうですか、何時の間にか酒に醉つぱらつて寢てしまつたものと見えますね。目を覺ますともう曉の光が欄間の所へ差してゐて、名代部屋にたつた一人で寢てゐるんです。咽喉が乾いてゐたので水を呑まうと思つて、枕元に置いてあつた水差に手を懸けやうとすると――如何です、そいつが口をきくぢやありませんか。

新太郎。大分怪談囃になつて來たね。

句樂。句樂さん、あんまり酒を飲むのはおよしよ。毒だよつてその水差が云ふのですよ。さうしてその聲がやつぱり紫君の聲なんです。何だかその聲を聽くと急に悲しくなつて來て、涙がぼろぼろこぼれてまるで留め度がねえんです。さうしてしまひには聲を立てて泣き出しました。驚いたのはここへ入つて來た華魁さね。私はみんなが留めるのも聽かずに外へ飛び出してしまつたが、さて何處へ往くと云ふ處もねえんでせう。そのうちやつて來たのが代地河岸なんです。柳橋を渡らうとするとまるで黑山のやうな人でさあ。何だつて傍の人に聽いて見ると、華魁

の身投げだつて云ふんです。さうするとそこでひよつくり出會つたのが先代の談州樓燕枝さ。これが私の耳の傍へ口を寄せて、驚いちやあいけねえ、紫君が身を投げたんだぜつて云ふんでせう。私は思はず人を搔き分けて前の方へ出て往きましたね。さうするとこれがまたをかしいやね。そこに並んでゐるのがみんな上下を著たお役人ばかりなんでさあ。傍にゐる人達が私をつかまへて、うつかりあすこに往つちやあいけねえ、あすこにゐるのは幽靈のお役人ばかりなんだからつて云つたんですが、そんなことに關つてはゐられませんや。いきなり飛び出して往つて紫君の死骸に縋り付いて、おいおい聲を立てて泣いたもんです。それから後はまるで夢中でさあ。田端の氣狂ひ病院にゐる間紫君のことばかり云ひ續けてゐたんださうですよ。

新太郎。僕の一番始めに往つた時なんぞはかなりひどかつたね。すつかり白井左近になつてゐて人相を見てやるつて云つて困つたぜ。

句　樂。（笑ふ。）ははは、さうでしたかな。もう大丈夫です。

（おぎん下手の路次より出づ。家の中に入る。雪やや積る。）

おぎん。如何もおそくなりました。（臺所に往きて。）おや、まるで火種がありませんね。

句　樂。お酣を付けて下さるんですか。恐れ入りますな。（安火を押し遣りて。）こに火種がありますよ。

おぎん。（安火を臺所に運ぶ。）まあ、哀れな火種だこと——

句　樂。（おぎんの後姿を見送りて。）若旦那。可哀がつておやんなさいよ。こんなおとなしい子は今時あんまりありませんよ。

新太郎。（笑つて。）馬鹿あ云つてる。（間。）おとしさんは如何したんだい。大變おそいやうだね。

句　樂。さうさね。あん畜生、何をしてゐやがるのか。しかしもう歸つて來ませう。

よ。（上手の障子を開きて。）やあ、雪が大分積りましたぜ。

（沈默。雪の降る音微かに聽ゆ。）

新太郎。靜かだねえ。

句樂。（溜息を吐く。）ええ、こんな時は如何も氣が滅入つていけねえ。

新太郎。それにさつきの話で、また紫君のことでも思ひ出したのぢやないかい。

句樂。（悲しげに笑つて。）ええ、すつかり思ひ出してしまひましたよ。始めて會つたのが丁度こんな雪の降る日でね。お客に連られて畫遊に往つたのか病み付きさ。（おぎんに。）まだお酣は付きませんかね。

おぎんの聲。まだ少し溫いかも知れないけれど——

（おぎんは膳と德利とを持つて出づ。）

句樂。（喜ばしげに。）こりやあ難有てえ、久しぶりの酒だ。（杯を新太郎に差す。）

さあ、まあ若旦那一杯。

（新太郎の杯におぎんは酒をつぐ。）

新太郎。（おぎんに。）おい、句樂さんにお酌をしておやりよ。

おぎん。ええ。（杯を句樂に差して酒をつぐ。）

句樂。（酒を飲みて。）難有てえ。何だか昔の夢を見て居るやうな氣がしますよ。（突然杯を置きて。）いけねえいけねえ、昔の夢なんてことを考へると——（戰慄して。）それ、またあの病院へ——あの眞つ青な病院へ往かなくちやならねえ。

新太郎。（驚きて。）如何したんだい、句樂さん。

句樂。いいえ、何でもねえです。（猶異樣なる調子。）若い時分にね。私が女と驅落をして長崎へ往つたことがあるんですよ。その時私もずゐぶん惡いことをした盛りでしたからね。女を稻佐の女郎に敲き賣つて、その金を旅費にして東京へ歸つて來たんでさあ。それがあなた不思議ぢやありませんか。あの田端の病院が稻佐のその女を賣つた家にそつくりなんですよ。（間）。さうさうさつきおぎんさん

に昔の夢の話をしようと思つたが、如何しても思ひ出されねえで止めちまつたのでしたよ。（おぎんに。）やつと思ひ出すことは思ひ出したが、今度は何だか話すのが怖くつて仕方がねえ。

おぎん。（再び恐怖の表情を示して。）もう好いわ。さあ、お酌をしませうね。

句　樂。（杯を取り上げて。）これは如何も濟みません。（新太郎に。）醫者からは酒を飲むなつて云はれてゐるんですが、如何もこればかりは止められませんや。しかし退院して二月やらなかつたのですからね。もうやつても好いでせう。

新太郎。しかしあんまり飲まない方が好いぜ。

句　樂。ええ。前見てえにはやりませんよ。

（おとし正面の路次より出づ。直ちに家の中に入る。）

おとし。（新太郎に。）おや若旦那。お出でなさいまし。（句樂に。）兄さん、お酒を飲んでゐるね。お醫者にあれ程止められてゐる癖に。

句　樂。何云つてやがるんでえ。關ふもんか。惡くなりやあ惡くなつた時よ。

新太郎。（困りて。）おれが酒を買ひにやつたんだが、惡いことをしたね。

句　樂。なあに大丈夫ですよ。何もご心配なさるにや及びません や。（おとしに。）まあ、そんなことよりも肝腎の二階は如何したんだ。

おとし。方々搜したんだが、中々好い所がないんだよ。おはつちやんの所の二階がまあ一番好ささうだから、あすこに極めてきたんだよ。

新太郎。何處だつて好いよ。それぢやあ早く往かうぢやないか。

句　樂。まあ、もう少しお待ちなさい。この酒を飲んでしまふまで。

おとし。そんなに飲んで如何する氣だい。若旦那と一所に往つておゐでよ。

新太郎。（おぎんに。）おい、その二階に往つて見ようよ。

おぎん。ええ。

おとし。（句樂に。）兄さん。知つてゐるだらう。あの呉服屋の隣の煙草屋さ。

句樂。うん。それぢやあちよつと往つて來るかな。

おぎん。（おとしに。）如何も御邪魔をいたしました。

おとし。如何いたしまして——

（新太郎。おぎん、句樂の三人は正面の路次へ入る。おとしは膳など片附け終りたる後、細目に障子を開きて外の雪を眺む。稍長き間。

延美津下手の路次より出づ。句樂の家の前に立ち留る。）

延美津。おとしさん。ひどい雪になつてしまつたね。

おとし。今お歸り——大層おそかつたんですね。

延美津。ええ、廻り道をしてゐたもんだからこんなにおそくなつてしまつて——句樂さんは——

おとし。今ちよつとそこまで——まあ、お上んなさいよ。たつた一人つきりなんだから。

延美津。さう——それぢやちよつとお邪魔をして往かうかね。

（延美津は句樂の家の中へ入る。二人は向ひ合ひて坐る。）

おとし。何だかこの雪はなかなか止みさうもないわね。

延美津。ええ、この分ぢや大分積りさうですよ。句樂さんはまだ席を休んでゐるの。

おとし。病氣をしてからすつかり怠け癖が付いてしまつてね。ほんとにあんまり長く休んでゐると困つてしまふのだけれど——それでも藝人の難有いことは、いろいろ世話をして下さる方があるもんだから、まあやつと如何にかしてゆけるのさ。

延美津。しかし藝人も女では仕方がないね。苦勞が多いばかりなんだもの、ほんとに今朝のやうなあんな騒ぎにも幾度出つ會したか知れやしない。考へて見ると女は全くつまらないねえ。

おとし。あなたがそんなことを云つてゐたら私なんぞ何て云つたら好いだらう。女郎上りの女なんてものは、まるで羽の取れた蟋蟀見たやうなものだからね。今更

泣かうつたつて泣くことも出來やしない。

延美津。そんなにくよくよしてゐちやあつまらないぢやないか。この世に生れた甲斐には面白をかしく暮らした方が眞實だと思はれるのだがね。私は今までに幾度今朝見たいに男から打たれたりしたか知れやしないよ。ご覽よ。この傷痕を——これはね、忘れもしない二十三の時さ。まだ銚子で藝者をしてゐる時分に、心中をしそこなつたお名殘りなのだよ。

おとし。まあ、男は如何しちまつたのだい。

延美津。男は死んぢまつたのさ。(間。)ああ、雪が降ると北海道のことが思ひ出されるよ。二十四の年から七年ゐたんだからねえ。そりやあずゐぶん嬉しいことや悲しいことがあつたのだよ。そのなかでも私たつたひとつ忘れられないことがあるの。

おとし。やつぱり男のことでなの。

延美津。ああ、勿論さ。しかしひとが聽くとつまらないかも知れないよ。

おとし。ああ、好いからお話しよ。

延美津。聽いて呉れるなら話すけれど——(うつとり障子を見る。)さうさね。何處から話したら好いだらう。兎に角私が北海道を方方流れ渡つた末、二度目に札幌に舞ひ戻つた時のことなのだよ。丁度家の隣が宿屋になつてゐて、そこには東京の役者に附いて來たお囃子の連中が泊つてゐたのさ。こつちも藝者のことだし直ぐ往來をするやうになつてしまつたのだが、そのお囃子のなかに、一人笛を勤めてゐる十七八の若い男がゐたのだよ。別段深くなつてゐた仲と云ふ譯ではなかつたけれど、もうその一座がそこを立つて東京へ歸ると云ふ晩に、私は何だかその人と別れるのが悲しくなつて、芝居の閉ねるのを待つて呼び出したものさ。もう春にはなつてゐたけれども、まだ路傍には雪が殘つてゐて、月の光だつて冷たかつたつけ。そりや今思ひ出してもその晩の景色がはつきり目に浮んで來るやうだ

ね。樂屋口から出て來たその人の手を引いて話し合ひながらぶらぶら歩いて往くうちに、何時の間にか私達は街の外へ出てしまつたのさ。（言葉を止めて回想に耽る。）

おとし。それから如何したの。

延美津。もうゆつくり話しちやゐられないから急いで話すよ。（間。）それからその人が笛を吹いたの。さうして私がその傍で泣いたの。その人もしまひには笛を吹きながら泣いてゐるのさ。笛の音が顫へて、しまひにはさう吹けなくなつてしまつたんだよ。（目に涙を浮べながら笑つて。）もう止さうね、こんな話は。ひとが聽いたらつまらない話に極つてゐるから——

おとし。それつきりその人には會はなかつたのかい。

延美津。時々會ひたいと思ふけれど——もうかうなつちやあ會つても呉れないよ。

（句樂正面の路次より出づ。醉ひて蹌踉として歩む。傘なし。）

句　樂。（怒鳴る。）なに、句樂の氣狂ひだと——馬鹿——何が氣狂ひだ。（空虛なる聲にて笑ふ。）ははは、世間の奴等はみんな氣狂ひなんだ。そいつらが何を云やがるんだ。おれは小猿七之助よ——それが仇討が怖いので俳諧亭句樂になつたのよ。如何でえ。分つたか。

（おとしはその聲を聽き、疑ふ如く耳を傾く。句樂は顫きて烈しく格子戸に突き當る。）

句　樂。べらぼうめ。おれの云ふことはみんな嘘だなんて、誰がそんなことを云やがるんだ。畜生。さあ、承知しねえぞ。出て來い。

（句樂はまた正面の路次の方へ歩む。おとしは外へ飛び出して引き留む。）

おとし。如何したんだね。こんなにお酒に醉つぱらつて——

句　樂。嬉しいぢやねえか。惚れた同士が一所になる。こんな嬉しいこたあねえぢやねえか。そこで飲んだのよ。若旦那から一兩貰つて、今そこの酒屋ですつかり

飲んぢまつたんだ。

おとし。さあ、そんなことは如何でも好いから、早く家の中へお入りよ。着物もすつかり濡れてゐるよ。

句樂。（急に聲を潜めて。）お前が鳥追お松だつてことは、誰にも知らせちやいけねえぞ。

おとし。（悲しげに句樂の顔を見る。）お醫者があれ程飲んぢやいけないつて云つたお酒を、お前は到頭飲んぢまつたんだねえ。

句樂。（猶聲を潜めて。）好いかい。もしお前が鳥追お松だつたことが知れると大變だぞ。

おとし。ああ好いよ。分つたよ。さあ、家へお入りよ。

（句樂は家の中へ入らむとして、驚きて外を覗きゐたる延美津と顔を見合はす。）

句樂。（叫ぶ。）おお、お前は紫君ぢやねえか。（座敷へ上りて。）ほんとに久しく會はなかつたなあ。

おとし。さうぢやないよ。お向ふの延美津さんぢやないか。

句樂。笑談云ふねえ。延美津さんはさつき聖天樣へ往くつて出懸けたぢやねえか。

（延美津に。）さあ、紫君、久しぶりで何處かへ往つて一杯やらう。

延美津。（小聲にておとしに。）また病氣が起つたらしいね。

おとし。（悲しげに。）如何したら好いだらうねえ。

句樂。（延美津に。）さあ、愚圖々々しずに支度しねえな。お前に始めて會つたのも、やつぱりこんなに雪の降る日だつたぢやねえか。（おとしに。）さあ、おとし、お前も早く逃げなくちやいけねえ。うつかりしてゐると仇討に會ふぜ。如何もこの間からおれ達を附け覗つてゐるやつがあるのに違えねえのだ。だからな——それさつき云つて置いた通りに、素性を隱してゐなくつちやいけねえぞ。おりやあ關はねえよ。おれが小猿七之助だつてことは誰でも知つてゐらあな。しかしお前

が鳥追お松だつてことは誰も知らねえ。知れたらそれこそ大變だ。それ――講釋師の典凌つてやつ――あいつが如何も怪しいぜ。藥研堀の一件もたしかにあいつに違えねえのだが――

おとし。（悲しげに頷く。）分つたよ。分つたよ。

（延美津立ち上りて歸らむとするを、句樂慌ただしくその前に立ち塞がる。）

句　樂。（延美津の手を取る。）何處へ往くんだ。待ちねえよ。今一所に往くから――何か溫けえもんで一杯やらうぢやねえか。（延美津當惑して佇む。）なあ、紫君。典凌のやつはお前にも惚れてゐたんだな。あいつの煙草入を質に入れて、お前の所へ通つたこともあつたが――あの煙草入の金具は好い彫だつたぜ。嬲の面よ。誰が彫つたんだか知らねえが、細い生々とした好い彫だつた。如何もあれが祟つてゐるんだな。あれからだぜ。お前はどつと煩ひ付く。おれは博奕で滅茶々々に負けてしまふ。（急に笑ひ出して。）はははは、べらぼうめ。おれは氣なんど狂つてやしねえぞ。世界の奴等はみんな氣が狂つてゐるんだ。第一世間の奴等はみんな嘘吐きだ。どいつもこいつも嘘ばかり吐きやがる。さうして眞實のことはひとつも知らねえ。早い話が眞實に女に惚れるやつだつてありやしねえぢやねえか。

延美津。さあ、この手を離してお呉れな。ねえ、句樂さん。何處へでもお前の往く所へ一所に往くから――

句　樂。さうか。（ぢつと延美津の顏を見る。）紫君、お前だけは一度も嘘を吐かなかつたな。（手を離して。）しかし女はなほさらそうだ。おれに今まで會つた女はみんな嘘吐きだつた。女位眞實のことを云はねえものはありやあしねえ。

おとし。兄さん。まあ、坐つたら好いぢやないか。

句　樂。しかしおれはこれから紫君と一所に何處かに往くんだから、坐つたりなんかしてゐる暇はねえよ。

延美津。句樂さん。もう何處かへ往くのは止して、家で飲まうよ。

おとし。ああ、それが好い、それが好い。ねえ、兄さん。さうおしよ。

句　樂。それなら家で飲んでも好いが——（坐る。）家ぢやあうまくねえからな。

（急に何ごとかに氣付きて。）さうだ。すつかり忘れてゐた。（部屋の隅を見て。）

あすこだ——あすこだ——

（句樂は一心に祈禱す。おとして延美津に目にて知らす。延美津そつと立ちて

臺所より抜け出しその家へ入る。）

おとし。兄さん。もうお寢みな。

（雪止みて、急に薄日差し來る。一人の娘下手の路次より出で延美津の家に入

る。）

おとし。（句樂の肩に手を懸けて。）兄さん。

句　樂。（怒りて。）何でえ、うるせえな。今不動樣を拜んでゐるところぢやねえか。

おれにはちやんと不動明王のお姿が見えてゐるんだが、お前には見えねえだらう。

（部屋の一隅を指差して。）それ、そこよ。難有てえ。難有てえ。お前も不動樣を

信心しなくつちやいけねえぞ。さあ、拜め。おれと一所に——拜まねえとぶん毆

るぞ。

（立ち上りておとしに打ち懸らむとす。）

おとし。何をするんだね。拜むよ。さあ、兄さんもお座りよ。

句　樂。（座りて。）うん。よし、よし。（同じ部屋の一隅を指差して。）見ろ。難有

てえお姿ぢやねえか。まるで成田屋のやつた不動樣見てえだなあ。（聲色を使ふ。）

わが大明王大威力は五智の中央にして大日如來の化來なり、一切衆生を度せん

がために、面に憤怒の相を現はし、智慧の利劍を以て煩惱の賊を斷ち——（身振

をしつつ。）好かつたぜ、ほんとに——

（延美津の家より再び三味線の音聽え始む。句樂は急に沈默して考へ込む。稍

長き間。

おとし。如何したんだい、兄さん。

句樂。如何もおれには分らねえことがあるんだが——

おとし。何さ。

句樂。今ここに紫君がゐやあしなかつたかい。

おとし。笑談云つちやあいけないよ。紫君さんは死んぢまつたんぢやないか。

句樂。（急に怒りて。）馬鹿あ云ふねえ。紫君が死んで堪るものか。おれの生きてゐる間は、紫君も生きてゐるに違えねえんだ。もう一度紫君が死んだなんて云つて見ろ。このままぢやあ置かねえぞ。（疑はしげにおとしを見て。）何だな。お前は紫君を何處かへ隠しやがつたのだな。（激して。）畜生。さあ、紫君を何處へ隠したんだ。早く出さねえか。早く出せ——早く出せ——出さねえと承知しねえぞ。

おとし。今會はせるから靜かにしておるでよ。

句樂。何でえ。そんなことを云つて胡魔化さうつたつて、おれはちやんと知つてゐるんだ。不動樣がちやんと敎へて下さらあな。紫君は何處にゐますかつて聽きさへすりやあ、きつと何處にゐるつてことを知らせて下するんだ。

（句樂は再び部屋の一隅に向ひて祈禱す。沈默。夕日の光寂しく障子に映り來る。）

句樂。（突然起き上りて笑ひ出す。）分つた。分つた、よし、さあ、おれはこれから紫君の所へ往つて來る。（急に悲しげに。）可哀想に紫君は、眞つ暗な牢屋のなかにゐるんだぜ。その牢屋のなかには一年中日の光が差したこたあねえんだ。（間。）だがあの牢屋の鍵は誰が持つてゐるだらう。あの牢屋のなかにはおぎんさんもゐるんだから——さうだ、若且那が鍵を持つてゐるに違えねえ。

（句樂は突然跳足のまま外へ飛び出す。）

おとし。（後を追ひて。）兄さん——兄さん——

（句樂は正面の路次へ走り入る。おとしも後を追ふて家より走り出づ。路次の

前に立ち留りて急に烈しく泣き始む。延美津の家の三味線の音突然止む。幕）

第三幕

同じく淺草馬道の煙草屋の二階。六疊と四疊半の二間。

上手は六疊の間の戸棚と壁。正面は窓。障子を閉め切る。下手の四疊半の間と襖にて隔つ。下手に窓。同じく障子を閉め切る。階子段は下手にあり。すべてこの階子段より出入す。壁に外套と中折を懸く。正面の窓の下に粗末なる机一個。その上に洋燈を置く。火鉢には藥罐を懸けあり。

午後五時頃。外はまだ明るいけれども、部屋のなかは薄暗くなりゐる。

（新太郎とおぎんとは火鉢に向ひ合ひ坐りゐる。）

おぎん。（洋燈を氣にして。）何だか厭に暗うございますね。（捩子を動かす。）まあ、急に明るくなりましたわ。

新太郎。明日好い洋燈を買はうよ。まだいろいろ買ひ物があるね。

おぎん。ええ。（欝ぎ込む。）

新太郎。如何したんだい。また何か考へてゐるのだね。

おぎん。それでも何だかあなたに濟まないやうな氣がしまして——

新太郎。何だい。まだそんなことを居つてゐるのかい。馬鹿だなあ。もうそんなことを云ふのはおよしよ。水臭いぢやないか。

おぎん。今頃お宅ぢやきつと驚いていらつしやいますよ。

新太郎。しかし樫村が家へ往つてよく話して呉れるさうだから、そんなに驚きもしやしまいよ、樫村はもうぢきこつちへやつて來るだらう。

おぎん。ここの家がお分りになりませうか。

新太郎。句樂の家で聽くから分るよ。しかしあいつもきつと驚くぜ。煙草屋の二階

とは氣が付かないだらうからなあ。

おぎん。（笑つて。）ええ。

新太郎。（じつとおぎんの顔を見て。）お前はかうやつてゐるのが嬉しくはないないかい。

おぎん。嬉しくないなんて――そんな――（直ぐ涙ぐむ。）私はあんまり嬉しいので何だか夢のやうな氣がいたしますわ。しかし何時までかうやつてゐられますか――先きのことなんぞ考へると心細くつて仕方がございません。（涙をこぼす。）

新太郎。もうそんなくだらないことを考へるのはおよし――さあ、涙をお拭き――（手巾を渡す。）ここの家の人でも上つて來ると見つともないからね。

おぎん。（涙を拭ふ。）ええ。

新太郎。（堪へがたき樣子にて。）さあ、ここは二人の世界なんだよ。もつとこつちへお寄りよ。（おぎんの手を取る。）如何したんだい。冷たい手をしてゐるぢやないか。

おぎん。だつて雪の降るやうな寒さなんですもの――

新太郎。（おぎんの顔を見ながら。）何だかお前は今日頼なささうな顔をしてゐるねえ。

おぎん。さうですか。しかし何でもないんでございますよ。

新太郎。ほんとにあんまりそんなことを考へるのはおよしよ。

おぎん。（伏目になりて。）女でございますもの――仕方がございませんわ。（新太郎が興奮して接吻せんとするを避けて。）まあ――

新太郎。如何して――

おぎん。（耻しさうに。）あんまりだしぬけなんでございますもの――びつくりいたしますわ。

（二人は徐に接吻す。稍長き間。突然階子段の下にて騒がしき物音起る。二人

は驚きて離る。）

句樂の聲。（階子段の下にて。）若旦那――若旦那――

新太郎。誰だい。句樂さんかい。お上りよ。

（句樂は階子段を昇りて出づ。着物は泥に塗れ、足には傷など付きゐる。殆ど人が變れる如く狂暴の表情となりゐる。續いて煙草屋の女房と娘のおはつ現はれ階子段の上に佇みゐる。）

句　樂。（立ちたるまま。）若旦那。あなたが鍵を持つてゐるんでせう。

新太郎。（驚いて。）鍵なんぞ持つてゐやあしないよ。如何したんだい、句樂さん。

着物が泥だらけだぜ。

女　房。跳足で上り込んで來たんですよ。

句　樂。（新太郎に。）なに、持つてゐねえ。そんなことはねえ筈だ。牢屋の鍵ですぜ。それ傳馬町の大牢の鍵さ。紫君があすこに入つてゐるのですよ。何の罪咎もねえのに可哀想ぢやありませんか。ねえ、若旦那。隱さずに鍵を出しておくんなさいな。

新太郎。ほんとに僕はそんな鍵なんぞ持つてやしないよ。

句　樂。それぢやあなたまだ知らねえな。おぎんさんも紫君と一所にその牢屋のなかにゐるのですぜ。

新太郎。（漸く句樂の狂へるに氣付く。）おぎんはここにゐるよ。

句　樂。笑談云つちやいけねえ。そりやあ死んだ田之助の幽靈さ。

新太郎。（女房に。）また病氣が起つたのですね。

女　房。さうでございますね。早く家へ知らせてやりませう。

おはつ。私往つて來ませう。おとしさんに知らせるのでせう。

（娘は階子段を降りて去る。句樂は坐りて沈默せまるま洋燈の燈を凝視す。）

おぎん。（小聲にて新太郎に。）如何しませう。怖いわね。

新太郎。大丈夫だよ。

女房。ほんとにこの前なんか大變でしたよ。今おとしさんが來るでせう。

（女房は階子段を降りて去る。障子の外も全く暗くなる。句樂突然立ち上りて叫ぶ。）

句樂。おお、あんなに大勢の跫音が聽える。畜生。到頭おれの居所を搜し出しやあがつたな。それで仇討に來やがつたのだらう。（急にがつかりして）いや、さうぢやねえ。跫音がまるで聽えねえやうになつてしまつたぢやねえか。べらぼうめ、おれには不動樣が附いていらつしやるんだぜ。いくら仇討に來たつて駄目なことよ。（考へて。）しかし何でおれは仇討に會ふんだらう。如何も分らねえぞ。（新太郎に。）ねえ。若旦那。あなたはその譯を知つてゐるでせう。

新太郎。分らないね。句樂さん。まあ坐つたら好いだらう。

句樂。（坐りて獨語す。）如何も分らねえ。嚊の煙草入を質に入れたことかな——さうぢやあねえ——何でも月が二つ出た晩のことだ。あの晩からこの仇討が始まるんだ。冬の眞つ最中のことで、丁度私はその時金車へ出てゐたんだが、席を出てから何處かで一杯やらうと思つて、ひよいと空を見ると月が二つ出てゐやがる、私はその時考へたね。こりやあ世の中がだんだん惡くなつたからだなとかう思つたんでさ。全くですぜ。若旦那、今にご覽なさい、戰があるから——ええ、ありますとも。そりやあ大きな戰がある。大變ですぜ。貧乏人と金持との戰なんでさあ。私なんか貧乏人の方の大將になつて出懸けるんだが、こいつが馬鹿に强いてね。向ふ所敵なしつて有樣で、金持は鏖殺しさ。（間。）しかし若旦那は一體どつちの方なんですね。

新太郎。（笑ひながら。）無論句樂さんの方の味方さ。

句樂。そいつは難有てえ。何しろ私は若けえ時から軍書を讀んでゐるから、戰のことには詳しいやね。（指を折りて數ふ。）三國誌、八犬傳、諺紫田舍源氏、伊勢物

語、徒然草、よものあか、柳樽――こりやあみんな立派な軍書でさあ。さあ、そこで戰となるとこれがみんな役に立つて來る。私の姿を見ると金持の方ぢやあみんな逃げ出しまさあ。とても敵ひつこねえんだから、いくら金持だつて命は惜しいやね(間)おや、私はこんな話をするつもりぢやなかつたんだが――さうだ。月の二つ出た晩の話だつけ。ぶらぶら傳法院の横をやつて來ると、ばつたり出會つたのが例の典凌つてやつさ。何處かで一所に飲まうつて云ふんで、二人で飲み出したのは好いが、この晩はまた變な晩で、いくら飲んでも二人とも醉はねえんです。一體この典凌つてやつが惡いやつでね。こいつが私の戀敵なんでさあ。前から紫君に惚れてゐやがつたに違えねえんだが、その晩始めて紫君に惚れてゐるつてことを私に云やがつたんですよ。これが敵討の發端なんですがね。(急にまた思ひ出して。)こんな話どころぢやねえ。若旦那。鍵を出しておくんなさいな。紫君が牢屋のなかで泣いてゐるんぢやありませんか。

おぎん。如何してあんなに紫君つてひとのことばかり云ふんでせう。

新太郎。やつぱり忘れられないのだね。可哀想に――句樂さん。今ぢきに鍵を搜してやるから待つておゐでよ。

おぎん。横にでもなつてゐたら好いでせう。

新太郎。さうしてゐるが好い。そのうちに鍵を搜して置くよ。

句樂。(荒々しく。)そんなことをしてゐられるものか。(部屋の一隅を見て。)不動樣がいらしつた。不動樣がいらしつた。紫君が如何してゐるかもう一度不動樣に聽いて見よう。

(句樂は祈禱す。稍長き間。)

おぎん。何を拜んでゐるのでせう。

新太郎。不動樣なんだよ。不動樣を信心してゐるんだらう。

(二人は句樂の祈禱せる姿を眺めゐる。)

句樂。（急に起き上りて。）若旦那。紫君が牢屋にゐるのは嘘だつたんですよ。あいつは山谷の重箱で鰻を食つてゐるんでさあ。あん畜生人を馬鹿にしてゐやがる。（立ち上りて。）ご免なさいまし。またお邪魔に伺ひますよ。

（階子段の方へ歩む。）

新太郎。（句樂に。）何處へ往くんだい。

句樂。（立ち留りて。）山谷までさ。私だつて女には會ひてえやね。

新太郎。よした方が好いだらう。句樂さん。あんな薄情な女に會つたつて仕方がないぢやないか。

句樂。薄情ですつて——そいつはあなたがあの女をよく知らねえからだ。あんな親切な女はありやあしねえ。全くですぜ。誰が何と云つても、私はあの女が薄情だとは思はないね。（また坐りて。）考へて見りやあ可哀想な女さ。あいつの父つて云ふのは旅役者で、そいつが金に困つたもんだから、娘を賣つてしまつたつてやつなんだ。（おぎんを見て急に笑ひ出す。）ははは、田之助の幽靈め。默つておれの話を聽いてゐやがらあ。面白れえ、面白れえ、こんな面白れえことはねえ。全く舞臺で見た時とちつとも變らねえからをかしいや。（新太郎に。）ねえ。若旦那。世の中に幽靈なんてねえなんて云ふやつがあるが、あいつは嘘ですぜ。幽靈はたしかにあるに違えねえ。誰でもみんな靈魂のねえやつはねえだらう。靈魂つてやつは圓い硝子の壜なんだが、そのなかに入つてゐる水の色が人によつて違ふんだ眞つ赤なやつがあるかと思ふと、眞つ青なやつがある。中には眞つ黑なやつがあるけれども、こいつは一番小さいのさ。しかしこの眞つ黑なやつは今にだんだん多くなつて來るね。私のも眞つ黑だ。あなたのも眞つ黑だ。（間。）この靈魂を時々壞すやつがあるんだね。何しろ硝子だから直ぐ壞れらあね。さうすると大變だ。直ぐ氣狂ひになつてしまふ——

新太郎。さうするとお前は——（言ひ懸けて止む。）

句樂。（闇はず話し讀く。）だんだん世の中が悪くなるに從つて、この靈魂を壞すやつが多くなつて來るのだ。あつちでもこつちでも靈魂を壞す。さうすると硝子のかけらが風に吹き飛ばされて、何處へ往つても靈魂の粉なだらけだ。しまひには世の中が氣狂ひで一杯になる。もうさうなると理窟も何もあつたもんぢやねえ。毎日々々人殺しがある。あつちでもこつちでも血醒い噂ばつかりだ。人間がすつかり死に絶えてしまふまでその騒ぎが續くんだね。

新太郎。そいつは大變だな。不動樣を信心しても駄目なのかい。

句樂。不動樣だつてやつぱりしまひには氣が狂つてしまはあね。

（階子段を昇りておとし出づ。續いて樫村出づ。和服。）

おとし。直ぐ來ようと思つたんですが、お醫者樣の所へ往つたりなんかしてゐたものですからおそくなつてしまひました。如何もお騒がせ申して濟みません。

樫村。今句樂さんの所へ君のゐる所を聽きに往くと、また氣が狂つたつて話だもんだから驚いたのだよ。

新太郎。さうか。可哀想に——なかなかほんとに快くなるまでは大變らしいね。

おとし。（句樂に。）さあ、兄さん、家へ歸らうよ。

句樂。誰の家へよ。

おとし。兄さんの家へさ。

句樂。おれに家なんぞありやしねえよ。家なんぞあつて堪るものか。家は墓見てえなものだ。唯家には生きた人間が住んでゐるが、墓には死んだ人間が住んでゐる。たつたそれだけの違えぢやねえか。

おとし。（不圖氣付きて。）何を云つてゐるんだね。さあ、紫君さんが待つてゐるから早く往かうよ。

句樂。ほんとか。それなら歸らう。

新太郎。（おとしに。）大丈夫かい。

おとし。（頷く。）ええ。

（句樂は立ち上りておとしと共に階子段より去る。）

おぎん。ほんとにおとしさんが可哀想ですね。

新太郎。もうあの病氣は快くなりさうもないやうな氣がするね。好い藝人を惜しいものだ。（間。）樫村君。君はああ云ふ藝人の末路を考へたことがあるかい。

樫村。そりやああるよ。今まで句樂に會ふ度に、何時もそんなことを考へたよ。

新太郎。さうだらう。句樂を見ると誰でもそんなことを考へずにはゐられないよ。（感傷的に。）しかしあいつはああやつて氣が狂つてゐる方が幸福なのだ。世の中にはさう云ふ人か大勢ゐるよ。氣が狂つた方が幸福な人が——

樫村。君だの僕だのもやつぱりその仲間かね。

新太郎。さうさ。だんだんその仲間に入つて往くやうだね。

おぎん。まあ、氣狂ひのお仲間入りなんて眞つ平ですわ。

新太郎。お前は大丈夫だよ。しかしお前は今にあのおとしさんのやうに、氣狂ひの介抱をしなけりやあならないよ。

おぎん。あんなことを——もうそんな厭なことを云ふのはおよしなさいまし。

樫村。（快活に笑ふ。）つまらないことを云つてゐる。（急に眞面目に。）さつきあれから橋場のお宅へ往つておつ母さんにだけお目に懸つたがね。お父うさん大分怒つてをられるらしよ。

新太郎。（冷笑の調子。）さうかい。家の體面を汚したつて云つたらう。お極り文句だ。

樫村。うん。そんなことも云つてをられたやうだつたよ。それでもう一度よくお話しをすることにして來たのだよ。（磊落なる態度にて。）考へて見りやあつまらないなあ、もうよせよ、家なんぞ繼ぐのは。それよりこの二階にかうやつてゐる方が餘つ程好いぞ。

おぎん。しかし私何だか濟まないやうな氣がいたしますわ。

新太郎。好いよ。心配しなくつても。どうせおれはかうなるべき人間なんだからね。

（沈默。三人は各異りたる想に耽る。）

樫　村。（突然。）如何したらうなあ、句樂は。ちよつと家へ往つて樣子を見て來らあ。

新太郎。さうか。直ぐ歸つて來るだらうね。

樫　村。うん。

（樫村は階子段を降りて去る。）

おぎん。私お宅のことを考へると氣になつてなりません。奥樣なんかさぞ私をひどい女だと思つていらつしやいませうね。

新太郎。（面倒臭ささうに。）如何思つてゐたつて好いぢやないか。そんなことを心配してゐたらきりがないよ。

おぎん。（悲しげにうな垂れて。）ええ。しかしあなたは何時迄も私と一所にゐて下さるでせうねえ。私もしあなたから棄てられるやうなことがあつたら、それこそもう生きてはをりませんよ。（泣く。）

新太郎。お前を棄てる——そんなことがおれに出來ると思つてゐるのかい。（おぎんの肩に手を懸けて。）さあ。もう泣くのはおよし。そんな泣き顏を樫村に見られたりすると變だよ。

おぎん。ほんとに私もしあなたから棄てられたら、身でも投げて死んぢまひますわ。

新太郎。（いぢらしげにおぎんの横顏を見る。）さあもうそんなことを云ふのはおよし。ほんとにお前は氣の小さい女だね。（慰めて。）かうやつて家も何も棄ててしまつて、お前と一所に暮らさうとしてゐる位ぢやないか。お前を棄てるなんてことがあるものか。そりやあお前の取越苦勞だよ。

おぎん。取越苦勞だとすりやあ安心ですけれど——（泣き止みて涙を拭く。）目の緣

が赤くなつてゐるでせう。

新太郎。ああ、少し――

おぎん。樫村さんが見て泣いたつてことが分るか知ら――

新太郎。分るものか。あいつはそんなことには氣が付かないよ。

おぎん。もし泣いたつてことが知れると何だか極りが悪うございますわ。

（遠く半鐘の音聽ゆ。）

新太郎。おや、半鐘の音が聽こえるね。幾つ番なんだらう。

おぎん。遠くのやうですわね。

新太郎。（數へて。）それでも三つ番だよ。

おぎん。何處でせう。

（近くにても半鐘を打ち始む。新太郎とおぎんは立ち上りて障子を開く。雪の積れる屋根を越して、空に映れる淺草公園の灯明り見ゆ。二人は寄り添ふやうにして窓より外を見る。）

新太郎。寒いだらう。

おぎん。ええ。（屋根のあなたを差して。）あら、あすこですわ。

新太郎。馬鹿なことを云つちやいけないよ。ありやあ公園の灯が映つてゐるのだよ。

おぎん。さうですか。それぢや火事は何處でせうね。

新太郎。何だかここからは見えないやうだね。

（樫村階子段を上りて出づ。）

樫　村。火事だな。ここから見えるのかい。

新太郎。ううん。まるで見えない。何處だらうな。

樫　村。さあ――今下の娘が交番へ聽きに往つたやうだから、もうぢき歸つて來ると分るだらう。

新太郎。如何したい、句樂は。

樫　村。ぐつすり寢込んでしまつてゐるよ。あれできつと二日位寢通すのだぜ。可哀想にあの妹つて女は傍に坐つてぼんやりしてゐるのさ。(不思議なることを見出せる如く。)君。句樂はあの前にゐる清元の師匠さんに惚れてゐたらしいね。如何もそれで氣が狂つたのらしいよ。

新太郎。さうかね。僕はまた句樂が僕とおぎんとを見て、昔の自分の姿をまざまざと見せられたやうな氣がして、あんなになつたのぢやあないかと思つてゐたのだよ。

樫　村。さうさなあ。そんなこともあるかも知れない。しかし今まで皮肉や洒落ばかり云つてゐた男が、急にあんなに氣が狂つてしまつたりなんかするのを見ると、何だかお互ひにかうやつて話し合つてゐるのさへ、不思議なことのやうに思はれて來るね。

新太郎。さう云へば世の中のことはみんな不思議さ。ああやつて鳴つてゐる鐘の音さへ不思議に聽えるだらう。

樫　村。さうだな。(間。)もう下の娘は歸つたらう。

新太郎。(おぎんに。)お前ちよつと往つて聽いて來て呉れないか。

(おぎん階子段を降りて去る。半鐘の音止む。急に寂寞となる。)

樫　村。如何したんだい。馬鹿に考へ込んでゐるぢやないか。

新太郎。何だか句樂が氣が狂つてしまつたと思ふと、急に世の中が寂しくなつたやうな心持がして來たのだ。

(おぎん階子段を昇りて出づ。)

おぎん。瓦町ですつて——まだ燃えてゐるんださうでございますよ。

樫　村。(驚きて。)瓦町——そいつは大變だ。僕の家が燒けてゐるのかも知れない。

新太郎。そんなことはないだらう。

樫　村。兎に角僕は歸るよ。それではいづれまた會つて話さう。

新太郎。どうぞちよくちよくやつて來て呉れたまへ。

（樫村は階子段を降りて去る。二人は階子段の上まで見送る。）

新太郎。さやうなら。

樫村の聲。（階子段の下より。）さやうなら。

（二人は戻りて火鉢の傍に坐る）

おぎん。まさか樫村さんのお宅が燒けてゐるんぢやないでせうね。

新太郎。さうぢやないだらうと思ふがね。（窓の方を見て。）おや、障子を開けたままだつたね。道理で寒いと思つた。（立ち上らんとす。）

おぎん。（立ち上りて。）私が閉めますからよろしうございますよ。（障子を閉づ。）

新太郎。（坐り直して。）まだ心細いやうな氣がするかい。

おぎん。いいえ。あなたさへ傍にゐて下さるなら——しかしこれからあなたは如何なさるおつもり。

新太郎。仕方がないから何か書くのさ。さうしてしまひには句樂のやうになつてしまふのだらう。

おぎん。（わざとらしく戰慄して。）笑談にもそんなことは云はないで下さい。あなたがあんな氣狂ひになるなんて——まあ、考へても怖しいやうな氣がいたしますわ。

新太郎。（笑つて。）笑談だよ。さあ、もうそんな話はよさう、もつとこつちへお寄りよ。（おぎんの手を握る。）

おぎん。（新太郎に寄り懸つて。）私何時までもかうして二人で暮らしたうございますわ。

新太郎。まあ、何時までもかうやつて暮らさうよ。たつた二人で——

おぎん。ええ。

新太郎。ね、好いだらう。

（二人は接吻す。長き間。恍惚として目と目を見合せゐる。
遠く消火の半鐘の音聽え、續いて近くにても同じく消火の半鐘を打つ。）
新太郎。（目覺めたる如く。）火事ももう消えたやうだね。
（おぎんは默つて頷く。二人は猶恍惚として目と目を見合せゐる。幕。）

無賴漢（四幕）

人物

山崎新太郎。（元は大學生）
おぎん。（その情婦）
勝兵造。（本名は樫村虎彦、狂言作者）
小しん。（盲目の落語家）
焉馬。（落語家）
おくめ。（焉馬の女房）
おはつ。（煙草屋の娘）
清兵衛。（老いたる刺青師）
典凌。（講釋師）
蝶丸。（盲日の新内語り）
おせん。（蝶丸の女房）
おかく。（下座の女）
辰造。（松林軒の亭主）
作さん、鐵さん。（松林軒の客）
其他小しんの車夫、松林軒の客と女中、往來の人々等出づ。

場所

東京。（第一幕、第二幕、第四幕は淺草、第三幕は深川。）

時代

現今。（「俳諧亭句樂の死」より一年の後。）

第一幕

淺草の公園に近き横町にある、或る小料理屋の中。多くの居酒屋の如く陰鬱なる家。殆んど全部土間なれども、上手に六疊程の疊を敷きたる所あり。土間の上手は板壁にて仕切る。座敷の上手は汚れたる襖にて仕切る。正面は下手寄りに一間程の出入口あり。直ちに往來に通ず。松林軒と書きたる紺の暖簾を懸く。上手寄りに板場。皿小鉢を並べたる棚、鍋を懸けたる七輪などあり。その上の桁に白き字にて料理の品書を記したる黑き板を並べて懸く。上手板壁の前に薦被りの酒樽を置く。その上のところに時計あり。土間には長方形の臺を二個並べて置き、その臺を差し挾んで四個の長き腰懸を置く。座敷には汚なき座布團を敷く。

下手はすべて板壁。酒などの廣告のビラ畫を懸く。

電燈の光やゝ暗く、暖簾の外を往來する人の影折々見ゆ。溫かきため屋根の上より雪の解けて落つる音時々聽ゆ。三月の上旬。大雪の降りたる日の翌夜。丁度十二時を打ちたるところ。

（馮馬と典凌とは上手の座敷にて酒を飲みゐる。馮馬は三十六七歳位の落語家。典凌は四十歳位の講釋師。作さんと鐵さんとは土間の臺の所にて酒を飲みゐる。作さんは五十歳位。鐵さんは三十二三歳位。二人とも職人體の男。その外に三人連れの遊人風の客ありしが、直ぐに出てゆく。辰造は七輪の下を煽ぎゐる。松林軒の亭主。三十五六歳位。一人の女中眠さうに酒樽に凭り懸りて鐵さんと話しゐる。）

鐵さん。いけねえぜ、毎晩あんな所で立ち話なんぞしてゐちやあ——

女　中。笑談云つてゐるよ。私はそんなことしやしないよ。

鐵さん。白ばくれちやいけねえせ。粂の平内樣だつて知つてゐらあ。

亭　主。（口を出す。）なにね、こいつは近頃色氣付きやがつて仕方がねえんでさ。

（女中に。）何をぼんやりしてゐやがるんだ。お燗が付き過ぎるぜ。

（女中は驚きたるやうに徳利を取り出して座敷の方へ持ちゆく。作さんと鐵さんは何か低聲に語り合ひつつ酒を飲む。）

女　中。（馮馬に。）馮馬さん、如何もお待ち遠さま。

馮　馬。（少し醉ひたる調子。）いよお、如何したい。相變らずお愛想が好いんだね。みんなお前に惚れて來るんだぜ。

女　中。また馮馬さんの十八番が始まつたよ。誰が本氣にするものかね。

（女中は亭主に呼ばれて去る。女中は誂へ物を持ちて作さんの方へゆく。馮馬と典凌とは次第に高聲に語り始む。）

典　凌。さうよ。おれもあんまり好い氣持はしねえよ。何樂とは喧嘩をしたつきり

到頭死ぬまで會はなかつたんだからなあ。

馮　馬。なにさ、きう氣にするこたあねぇやね。その喧嘩つて云つても、元はと云へば句樂の嫉妬から起つたことなんぢやねぇか。あいつが紫君に惚れてゐるもんだから、お前にあんなことを云つたのよ。

典　凌。そのことはおれにもよく分つてゐるよ。しかし氣が狂つてからも、典凌はおれの敵だなんて云つてゐたさうだが、それを聽くとおれもあんまり好い氣持もしねぇからなあ。しかしなあ、馮馬さん。早えもんぢやねぇか。もう句樂が死んでから一年になるぜ。

馮　馬。うん。何だかついこの間のやうな氣がするが——さうよなあ、丁度一年だ。忘れもしねぇ、小しんの家であいつが死んだつて話を聽いたんだ。それから——たしか柳橋と二人だつたつけ——直ぐ病院へ往つて見ると、あいつは木乃伊見てえになつて死んでゐやがるのよ。（醉ひながらも悲しげに。）痩せつ削けたあいつの死顏を見た時には、あああひでえ姿になりやがつたと思つて、さすがにおれも涙がこぼれたぜ。（恨むやうに。）典凌さん。お前も喧嘩して分れたきりだから來にくかつたかも知れねぇが、何故あの時來て呉れなかつたんだ。おれはこれだけは句樂に代つてお前さんに云ひたいね。

典　凌。だつてお前そりやあ無理ぢやねぇか。

馮　馬。なあにちつとも無理なこたあねぇや。句樂だつて氣が狂つてからも敵だなんて云つてゐたものの死ぬまで敵でゐたかあなかつたらう。何しろ高が色事ぢやねぇか。藝人にも似合はねぇ。もつとあつさりやつて貰ひたかつたね。

典　凌。（笑つて。）さう云はれりやあ一言もなしさ。句樂が生きてゐりやあ仲直りに一杯飲むと云ふことも出來るが、死んぢまつだものは如何することも出來ねぇぢやねぇか。

馮　馬。（不機嫌に。）何を云つてゐやがるんでえ。おれはそんなことを云つたんぢ

やねぇや。（典凌に杯を差す。）まあ、一杯飲みねえ。私からもお前さんに恨みがあるね。

典　凌。へえ、どんなことなんだね。私はお前さんから何も云はれることはないと思ふがね。

馮　馬。どんなことつてお前もあんまりぢやねぇか。お前のずぼらはよく知つてゐるが——

典　凌。おつと待ちねえ。ずぼらはお前の方が本家だらうぜ。

馮　馬。（ちよつと困りて）。おれのづぼらは分つてゐらあな。まあ默つて聽くが好いや。

（この時山崎新太郎正面の出入口より入り來る。荒みたる顏色の二十二三歳位の男。）

殆んど渾名の如く「若旦那」と呼ばる。直ぐ座敷の方へ來る。）

新太郎。（突然。）誰がお前の話なんぞ默つて聽いてゐるやつがあるものかい。

馮　馬。おや、こん畜生、聽いてゐやがつたな。（言葉の調子を變へて。）若旦那、脅かしちやあいけませんぜ。さあ、こつちへお上んなさい。

新太郎。（座敷へ上る。）如何もいけねえよ。近頃はすつかりこの家を覺えつちまつて、毎晩のやうにやつて來るんだぜ。（作さんに。）やあ、今晩は——

作さん。今晩は。若旦那、お前さんは昨夜はずゐぶん醉つ拂つてゐたねえ。

新太郎。さうでしたかね。自分ぢやあまるつきり知らねえのさ。家へ歸つて見ると手も足も傷だらけぢやねえか。

作さん。さうでせうまるで正體がねえんだもの——

新太郎。もう酒は眞つ平御免だ——と云ふのは嘘よ。やつぱり夜になると飲みたくて仕方がねえ。（馮馬に。）それにね、馮公。

馮　馬。馮公はお止しよ。

新太郎。さうか。それぢやあ馮馬さん、如何もおれは近頃句樂のことばかり思ひ出

していけねえよ。

馬　馬。（不滿らしく。）へえ、をかしなことを云ふね。句樂のことを思ひ出すのが、如何していけねえんです。

新太郎。それがさ。唯句樂のことを思ひ出すのなら好いが、おれのはさうぢやあねえんだよ。おれのはな――さうさ、何つて云つたら好いかね。

馬　馬。（よく分らずに。）ええ。

新太郎。さうだ。句樂のことを思ひ出す度毎に、おれも句樂のしたやうなことを、しなくつちやならねえやうに思はれて仕方がねえのだ。つまり句樂の二代目になるつてことよ。（不意に立ちて亭主の傍にゆき何か吩附けて元の所へ來る。）ねえ、馬馬さん。おれがかうやつて家を出てのらくらしてゐるのも、みんな句樂のおかげなんだ。おれもあいつに唆のかされて、到頭家を出る氣になつたのだから、當り前なら句樂つてやつは、おれに取つちやあ好くねえやつさ。

馬　馬。好くねえやつですとも――あんな無賴漢はありませんぜ。（急に眞面目になりて。）それであなたが二代目句樂にならなくちやならねえと云ふのは、一體如何云ふ譯なんですね。

新太郎。それと云ふのはね――（云ひ懸けて典凌を見て馬馬に呀く。）誰だい。

馬　馬。さうだ。若旦那はご存知ねえでせう。おい、典凌さん、この方がさつき話した無賴漢の若旦那さ。

典　凌。ああ、さうですか。私は典凌で――

馬　馬。やつぱり句樂と一所に暴れた連中なんでさあ。

新太郎。話はよく聽いてゐたよ。だが典凌さん、句樂は死ぬまでお前のことを云つてゐたぜ。

馬　馬。だから私もさつきから云つてゐるんでさめ。句樂と喧嘩したつて云ふのも、元の起りはと云へば高が色事なんだから、もつと藝人らしくあつさりやつて貰ひ

てえと云ふんですよ。

典　凌。しかし相手は狂人ぢやねえか。

焉　馬。（怒つて。）狂人だつて好いぢやねえか。一體おれはさつきからお前の云ひ草が氣に食はねえんだ。何かと云へばあいつは狂人だつて云やがる。その狂人にやあ誰がしたんだ。

典　凌。自分で勝手になつたのよ。

焉　馬。笑談云ふねえ。お前が紫君に水を差して、句樂のことをいろいろ云つたんぢやねえか。ほんとにあの時分の句樂の悄氣やうつたらなかつたぜ。すつかり窶れてしまつて、まるで清玄見てえな姿をして席へも往かずに寢てばつかりゐやがつたけ。

新太郎。二度目に氣が狂つた時にも、ずゐぶん典凌つてことは云つてゐたね。自分が小猿七之助で、妹のおとしが鳥追お松よ。その二人を典凌が仇討に來るつて云つちやあ騒いだものよ。

典　凌。つまらねえことを云やがるぢやねえか。なあ、焉馬さん、私だつて——

焉　馬。何を云つてやがるんでえ。第一お前は句樂と喧嘩をしてからつてものは、おれ達の所へもまるつきりやつて來なかつたぢやねえか。

典　凌。そりやあお前おれはあれから旅に往つちまつたからよ。

焉　馬。嘘を吐きやがれ。そりやああれから餘つ程經つてからぢやねえか。

新太郎。二三日前小しんに會つたら、あいつもさう云つてたぜ。典凌位見そくなつたやつはねえつて——

典　凌。（投ぐるやうに。）何を云つてゐやがるんでえ。

焉　馬。（荒々しく。）何だと——もう一度云つて見ろ。

典　凌。あんまり人を馬鹿にするなつてことよ。句樂が何でえ。高が狂人の落語家ぢやねえか。句樂々々つてご大相なもののやうに云つてゐやがらあ。何處の若旦

那だか知らねえが、あんなやつの二代目になりてえなんて、物好きな人もあつたものさ。

焉馬。何を吐かしやがるんでえ。（立ち上りて典凌の腕を攫む。）さあ、表へ出ろ。（皆立ち上る。亭主と新太郎とは二人の中に留めに入る。）

新太郎。おい。止せよ。つまらねえぢやねえか。

焉馬。なあに、若旦那、留めずに置いて下さい（典凌に。）さあ、出ろつて云つたら出ねえか。

典凌。畜生——

（典凌は焉馬に飛び懸りて横顔を打つ。二人は取つ組合ひを始む。正面の出入口に往來の人々現はる。「喧嘩だ」「喧嘩だ」などと云ふ聲聽ゆ。典凌と焉馬は取つ組合ひたるまま土間へ轉げ落つ。そのうち新太郎も留める振をして典凌を毆る。）

亭主。（往來の人々に。）おい、みんなそこに立つちやいけねえ。（二人に。）そこで喧嘩をしちや困るぢやありませんか。

作さん。巡査でも來ると面倒臭えぜ。第一ここの家で迷惑すらあな。

新太郎。もう止せよ。

焉馬。（立ち上りて。）なあに、こん畜生。生意氣なことを云やがらあ。さあ、おれと一所に表へ出ろ。

典凌。（立ち上りて。）往かなくつてよ。

焉馬。さあ、來い。

（焉馬は典凌の袖を攫みて正面の出入口より出でゆく。新太郎も二人に續きて出でゆく。入口の見物人も見えずなる。作さんと鐵さんとは漸く腰を下ろす。）

作さん。一體如何したつて云ふんだい。

鐵さん。何でも句樂のことからぢやねえのかい（亭主に。）ねえ、さうだらう。

亭主。ええ、さうらしうございますね。（思ひ出したるやうに。）句樂さんも家へよく

やつて來ましたが――

作さん。句樂つて誰のことだね。

鐵さん。お前知らねえのか。俳諧亭句樂つて落語家がゐたぢやねえか。ほら坊主頭の日のぎよろつとした男よ。去年だつたか氣が狂つて死んだが、好い落語家だつたぜ。

作さん。うん、あいつか。先に文枝つて云つた男だな。

鐵さん、さうか。そんなことはおれは知らねえや。何だか今の喧嘩ですつかり酒が醒めちやつた。（亭主に。）おい、辰さん、もう一本熱くしてくんねえ。

作さん。如何しやがつたらう、あいつ等は――。

亭主、何しろ焉馬さんは喧嘩が好きですからね。

鐵さん。あの典凌つて講釋師はここへちよくちよくやつて來るのかい。

亭主。いいえ、二三年前は句樂さんと一所によくやつて來ましたが、近頃はまるつきり來やしねえんです。今夜久しぶりで焉馬さんが連れて來たんですよ。

鐵さん。さうかい。あん畜生この間小柳で「小金井小次郎」を讀んでゐやがつたが、下手つ糞で聽かれなかつたぜ。

作さん。さうだらうな。あの若旦那つて云ふのは一體何なんだね。

鐵さん。何だかな。焉馬なんかと友達のやうにしてゐるやうだね。よくここに來てゐるぜ。

（女中徳利を持ち來る。）

作さん。（女中に、）お前知つてゐるだらう、あの若旦那つて云ふのは一體何だい。

女中。何でも橋場あたりの好い所の息子さんなんだつてさ。

鐵さん。それが勘當でもされたつて譯なんだね。

女中。さうなんでせう。女と一所にゐるんだつて云ふから――

作さん。へつ、洒落れてゐやがるな。その女つて云ふのはどんな女だい。

女　中。そんなこと私が知るもんかね。

（この時一人の女暖簾の間より中を覗き、直ぐに見えずなる。鐵さんは一人これに心付き、立ち上りて急ぎ足に外へ出でゆく。）

作さん。おい、如何したんだい。（女中に。）誰か來たのかい。

女　中。氣が付かなかつたよ。如何したんだらう。

作さん。慌てて飛び出して往きやがつたぢやねえか。

（鐵さんは笑ひながら入り來る。）

鐵さん。（一人で笑つて。）ははは、大笑れへだ。

作さん。如何したのよ。

鐵さん。おはつの阿魔だと思つて飛び出して往つたら違つてゐやがるのよ。

作さん。（面白さうに笑つて。）ははは、ざまあ見やがれつて云ひたくなるね。間抜だなあ、お前も——

鐵さん。それでもそこの暖簾の間から覗いて往つた顔が、如何してもおはつとしか思はれなかつたんだぜ。

作さん。そりやあ手前かおはつに惚れてゐやがるからよ。止せよ見つともねえ、煙草屋の娘の後を追つ懸けるなんて——まあ、一杯飲みねえ。ご苦勞樣なこつた。

錄さん。（笑ひながら前と同じやうに。）ははは、全く大笑れへだ、

（焉馬と新太郎入り來る。焉馬の着物の袖は半分ちぎれ、膝のあたりは泥だらけになりゐる。）

焉　馬。（亭主に。）辰さん、如何も濟みません。なにねあん畜生あんまり癪にさわることを云やがるから、引つ擊いてやつたのさ。

亭　主。何處も怪我はしませんでしたかね。

焉　馬。あんなやつと喧嘩して怪我なんぞして堪るものかな。

作さん。（冷かすやうに。）師匠、大相威勢が好いぢやねえか。

馬　馬。いや、如何も作さんも鐵さんも濟みません。飛んでもねえ野暮なことをやつちまつて――

作さん。面白かつたよ、芝居を見てゐるやうで――お前さん　まるで中野信近見てえだつたぜ。ねえ、鐵さん。

鐵さん。成程。中野か――こいつは好いや。

馬　馬。おや、おや、開盛座はひどいね。（座敷へ上らうとして。）こいつはいけねえ。ちよつと雑巾を借してくんねえ。

新太郎。雑巾ぢやあ駄目だぜ。何しろ雪解の泥濘なんだもの――（座敷へ上る。）

亭　主。（女中に。）そこの手桶に水があるだらう。

女　中。ええ。

（女中は手桶を持ち來る。馬馬は足を洗ひて座敷へ上る。）

馬　馬。さあ、飲み直しだ。ここを片附けて何か見つくろつて持つて來てくんねえな。

（女中は片附けて去る。）

鐵さん。馬馬さん。あれから如何したんだい。

馬　馬。あれからかい。典凌のやつを滅茶々々に打ん毆つてしまつたのよ。到頭あん畜生逃げつちめへやがつたぢやねえか。（新太郎に。）ねえ、若旦那。好い氣味でしたね。

新太郎。あん畜生驚きやがつたらうな。留めてゐたやつまでぽかぽか毆り始めたんだから――

馬　馬。だけど若旦那も喧嘩は上手になりましたね。

新太郎。つまらねえことばかり褒めちやあいけねえ。この間はお前博奕がうまくなつたつて褒めたぢやねえか。

馬　馬。ああ、さう云やああの時の借がありましたね。

新太郎。まあ好いやな。

（女中膳を持ちて座敷に來る。）

鐵さん。（作さんに。）おい、もう往かうぢやねえか。

作さん。うん。面白れえ芝居は見ちまつたし――もう往かうか（立ち上りて二人に。）

お先きに。

鐵さん。さやうなら。

馬　馬。
新太郎。（同時に。）さやうなら

（作さんと鐵さんとは板場の所にて勘定をして出でゆく。）

鐵さんの聲。（出ると直ぐ。）ああ、雪がまだこんなに殘つてゐらあ。

（馬馬と新太郎とは再び酒を飲み始む。）

馬　馬。如何です、若旦那。今夜はうんと飲まうぢやありませんか。何しろ今夜は

句樂の弔ひ合戰をしてやつたやうなものですからね。

新太郎。全くさ。しかしこんなこたああいつの軍書にも書いちやなかつたらうなあ。

馬　馬。軍書か――あいつもをかしな男さね。何も本箱の蓋に軍書だなんて書かなくつても好ささうなものだが――さう云やあ、若旦那近頃句樂のことを思ひ出していけねえつて云つてゐましたね。

新太郎。ああ。

馬　馬。一體そりやあどんなことを思ひ出すんですね。

新太郎。あいつの云つてゐた言葉なんだよ。それが何と云ふことなしに、不意と胸に浮んで來やがるのさ。しかしまだそんな時分は好かつたが、昨夜なんかをかしいぢやねえか。まるで句樂がおれの耳の傍で話し懸けるやうな氣がしたのよ。おれは思はずぞつとしたね。

馬　馬。へえ、どんなことを云つたんですい。句樂のことだからろくなことは云は

ねえだらうな。酒を飲みてえとでも云ひましたかい。

新太郎。ううん、そんなこつちやねえや。(しばらく考へゐる。)まあね、句樂の云つた言葉のうちで、近頃よく思ひ出すやつを云つて見やうか。

馬　馬。ええ、どんなことですね。

新太郎。おれが思ひ出すのは、句樂が狂人になつてから云つた言葉ばかりだが、そのうちでも一番よく思ひ出すやつが五つ六つあるねえ。

馬　馬。狂人になつてからのことぢやあ、さつぱり分らねえ言葉なんでせうなあ。

新太郎。なあにさうでもねえさ。ひとつはかう云ふ言葉なんだ。それはまだ馬道の家に寢てゐる時分に尋ねた時に云つたんだか――「人間の生命つてものは飴見てえなもんですぜ。舐つてゐるうちになくなつてしまひまさあ」つて、かう云やがつたのよ。

馬　馬。へえ、をかしなことを云ひましたね。それから――

新太郎。これもやつぱりそれと同じ時さ。句樂のやついつも枕元に蠟燭を立ててゐやがつたらう。蝮の吉兵衛さんの話かなんか長々としてゐたが、不意とあの蠟燭の火を吹き消してかう云やがつたのさ。「ご覽なせえな。これが私の生きてゐるつて證據ですせ」つてね。

馬　馬。そいつは一體如何言ふお呪禁なんですね。

新太郎。お呪禁ぢやねえやな。しかしおれにも句樂が何故蠟燭を吹き消してそんなことな云つたか分らねえよ。

馬　馬。何だな。あいつきつと蒟蒻問答から思ひ付きやがつたんだな。

新太郎。まさかさうぢやねえだらう。兎に角あいつもまだこれからいろんなことがしたかつたんだね、軍書を讀んだり兜を作つたりしてゐたところで見るとあいつのいつも云つてゐた金持と貧乏人の戰ひつてやつを、ほんとにやるつもりだつたのに違えねえんだ。

馬　馬。さうですかね。（大分醉つて。）もうその話は止めませう。もつと面白れえ話をしやうぢやあありませんか。

新太郎。まあ、もう少し聽けよ。それからお前と一所だつたかな――句樂を病院に尋ねて往つたことがあつたらう。ほら、雪の降つた晩よ。歸りに小しんの家へ廻つて、夜晩くまで飲んだことがあつたぢやねえか。

馬　馬。ええ、あの時は句樂がひどく悪い時でしたぜ。口から出まかせの新内を唸つてゐたぢやありませんか。あなたその文句を帖面に書き付けてゐましたぜ。覺えてゐねえかね。

新太郎。覺えてゐる筈だよ。（考へ出さうとして。）まあ、待てよ。今に思ひ出すから――それよりもその時句樂の云つてゐた言葉で面白い文句があるんだよ（間。）あいつはあの時新内を止めて、急におれの方に向いたかと思ふと、ねえ、若旦那、あなたは昔一德齋つて手品師があつたのを知つてゐますかつて云ふぢやねえか。おれが知らねえつて云ふと、句樂のやつこいつは話せねえなつて云ふやうな顏付をしたが、暫くしてまたかう云ふのよ。「私は手品位面白れえものはねえと思ふ。あいつを見てゐりやあ世の中のことは何でも分る。生れるのも手品だし惚れるのも手品だ。さうして死ぬのもやつぱり手品だ。」――とかう云つてあいつは悲しさなう顏をしてゐるのよ。

馬　馬。（分らずに。）そいつは一體如何云ふ譯なんですね。

新太郎。つまり世の中のことは、みんな嘘ばかりだつて云ふんだらうね。（間。）それから暫く默つてゐたかと思ふと、あいつは急に勢付いてかう云ふのよ。今にご覽なさい。私が手品の種明しをしてやるからつて――さうしてあいつは例の鼻へ懸つた皺嗄聲で悲しさうに笑つたつけ。（しんみりとして。）ああ、何だかあの時の句樂の顏が今でも目に見えるやうだなあ。

馬　馬。いけねえや。句樂の話をすると如何も氣が滅入つていけねえ。さあ、どん

どんお乾しなせえな。

新太郎。よし來た。うんと飲まうぜ。(時計を見て。)しかし、あんまり晩くなると、この家が迷惑だからな。

馬　馬。なあにこんな家關やしません。

(この時遠くの方にて新内の流しの三味線の音聽ゆ。次第に近付き來る。二人はそれを聽きて悲しげに默り込む。しきりに酒を飲む。)

新太郎。(直覺したるやうに。)何だか蝶丸らしいぢやねえか。

馬　馬。だけど今頃こんな所を流してゐるのはをかしいね。

新太郎。なあに何處かお座敷か何かあつてこれから吉原へ往くんだらうよ。

(亭主外へ出で直ぐ入り來る。)

亭　主。やつぱり蝶丸ですぜ。

新太郎。それぢやあちよつと呼んでくんねえ。蝶丸にもずゐぶん久しく會はねえなあ。

(新内の流しの三味線の音丁度この家の前に來る。亭主入口の所まで出でゆく。)

亭　主。(呼ぶ。)おい、蝶丸さん、蝶丸さん。

(蝶丸と女房のおせん入り來る。蝶丸は盲目の新内語り。三十五六歳位。おせんは二十六七幾位。おせんは三味線をかかへゐる。)

蝶　丸。へえ、今晩は——

馬　馬。いよお、久しく會はねえな。

蝶　丸。(誰とも分らずに。)え、どなたですえ。(間。ちよつと考へて氣が付く。)あ、師匠か。あなたお一人ですかい。

銅　馬。若旦那と一所よ。一名遠山の金ちやんつて無賴漢さ。あいつも近頃腕を上げたぜ。酒を飲む、女は誑す——博奕は打つ——好い無賴漢になつちめえやがつたよ。

新太郎。また始めやがつたぜ。ねえ、蝶丸さん。こいつも酒を飲まねえと好い男なんだが、酒を飲んだら仕様がねえんだからなあ。(蝶丸に。)腰でも懸けたら好いぢやねえか。

蝶丸。へえ、難有う。

(蝶丸は座敷の端に、おせんは土間の腰懸に腰を下ろす。)

蝶丸。酒ぢやあ死んだ句樂さんなんかずば抜けてゐましたね。(間。)句樂さんと云やあもう亡くなつてから一年になりますね。早えもんだな。私はついこの間のやうに思つてゐたんだが——

新太郎。さうさ。あの晩はお前の新内を聽きながら、小しんとおれとで泣いたつけなあ。

蝶丸。何をやりましたかね、あの晩は——さう、さう、玉屋新兵衛だつたかな。

新太郎。さうだよ。あの「比翼の初旅」の上に、紫君句樂と並べて書いてあるやうだつたら、あいつもどんなに嬉しかつたらうなんて、小しんと二人で話したつけが——

蝶丸。さうでしたな。何だかあの晩は私も貰ひ泣をしてしまひましたよ。

馬。おい、蝶丸さん。變なことを聽くやうだが、お前も目が見えねえで不自由だらうな。

蝶丸。なあに馴れつちまやあ何でもありませんや。今夜は小しんさんの所へ呼ばれてね——

新太郎。おや、今夜は小しんの家に往つてゐたのか。

蝶丸。あの人も變つてゐますね。一晩盲目同士で話をしたいつて云ふんでさあ。

新太郎。それでどんな話をしたのよ。

蝶丸。どんな話つて別段とりとめたことはねえんでさあ。

新太郎。何かやつたのかい。

蝶丸。ええ、「三勝半七」をやりましたよ。

馬。（つまらなさうに。）話なんぞしてゐちやあ面白くねえや。なあ、蝶丸さん、さうだらう。思ひ出したるやうに。）さうさう、ねえ、若旦那。あなた覺えてゐるつて云つてゐたね。句樂が病院にゐる時にやつてゐた新内の文句さ。

新太郎。ああ、大抵は覺えてゐるよ。しかし一寸お待ちよ。もう少し思ひ出す所があるから——

馬。蝶丸さん、お前知つてゐるかい。珍妙不思議な文句だぜ。

蝶丸。へえ、知りませんね。何ですかい。句樂さんが狂人になつてからのことなんですね。

馬。さうよ。あいつも呑氣な男さ。病院でいろんなものを覺えやがつたんだぜ。清元、長唄、常盤津、新内、一中、河東——みんなやつちまひやがつたのよ。あいつのは世話がねえやね。新内をやらうと思へば直ぐ目の前にお前ならお前が現はれるのさ。さうしてそいつに教はつてゐやがるんだから不思議ぢやあねえか。傍から見てゐると餘つ程不思議だぜ。一人で教はつたり教へたりしてゐやがるのさ。

蝶丸。（寂しげに笑ふ。）ははは、そいつはをかしうがしたらうな。（新太郎に。）若旦那。その句樂さんのやつてゐた新内つて云ふのは、一體どんな文句なんですね。

馬。そりやあかう云ふんだえ。おれが歌つて聽かせてやるから待ちねえ。（歌ふ。）

「傾城に誠なしとはわけ知らぬ、野暮の口から意氣過ぎの。粹の粹ほどはまりも強く、ただ懐かしういとしさの、愚痴になるほど戀しいもの、たとへこの身は淡雪と——

新太郎。何でえ、そりやあ「明烏」ぢやねえか。

焉馬。如何です。うまうがせう。(續けて歌ふ。)

「ともに消ゆるも厭はぬが、この世の名殘に今一度逢ひたい見たいとしやくり上げ、狂氣のごとく心も亂れ、涙の雨に雲解けて、前後正體なかりけり。

新太郎。これでこの男は聲が好いだけが不思議だよ。

蝶丸。若旦那。まだすつかり思ひ出しませんかい。

新太郎。うん、好いかい。かう云ふんだ。(思い出しつつ文句を云ふ。)

「道樂を人のほむるや四つ手駕籠、片棒かつぐ肩車、乘せて禿の癪のたね、胸のつかへに惱むより、いつそ闇夜の裏田圃、かへるかへるの三ひよこひよこ、逢ふが別れと思うてゐれど、せかれて無理な茶椀酒、踏むやら蹴るやらたたくやら、一所に死ぬる惡緣と、思へばおなじ歎きの淵、蝮と呼ばれし吉兵衛も、おろおろ涙に暮れてゐたる。

かう云ふんだよ。しかし少しは違づてゐるかも知れねえぜ。

蝶丸。(笑ふ。)ははは、こいつは好いや。「蝮と呼ばれし吉兵衛も」か。成程、句樂さんの作りさうな新内さね。(おせんに。)おい、ちよつと彈いて見な。

おせん。三味線を彈きて。)これで好いかい。

蝶丸。うん。(新太郎に。)何とか云ひましたね、一番始めは——

新太郎。「道樂を人のほむるや四つ手駕籠」だよ。

蝶丸。ああ、さうか。

(蝶丸はその文句を半分程歌ふ。焉馬も一所になりて歌ふ。新太郎は時々蝶丸に文句を敎へ、悲しげなる顏付にて聽きゐる。女中は居眠りを始む。)

蝶丸。(歌を止めて。)こりやあ新内としたつて面白うがすぜ。だけど少し辻褄が合はねえな。

新太郎。そりやあ仕方がねえやな。狂人の作つた文句なんだもの——。

(この時雪の解けて屋根より落つる音烈しく聽ゆ。)

蝶　丸。おや、あの音は何ですね。

亭　主。屋根から雪が落ちるんですよ。

蝶　丸。ああ、少し溫かくなつて來たからね。しかし昨夜の雪はひどうがしたなあ。

新太郎。お前はあんな晩でも吉原へ往くのかい。

蝶　丸。いいえ。あんな晩は家で一杯飲んで寢ちまふんでさあ。

焉　馬。昨日は小しんのやつ雪見に往つたさうですぜ。

蝶　丸。ええ、そんな話でしたよ。

新太郎。盲目の雪見は面白れえな。

蝶　丸。車に乘つて方々歩き廻つたんださうですがね——

新太郎。（急にほろりとして。）可哀想になあ。車の上でいろんなことを思ひ出してゐたらうぜ。こんな雪の降つた日にあんなことをしたこともあつたつけと——

蝶　丸。（身につまされて。）さうさねえ。私の盲目になつたのは子供の時分だから、さして思ひ出すこともないけれども、小しんさんのはついこの間だから、いろいろ思ひ出すこともありませうよ。

（時計は一時を打つ。）

新太郎。おや、もう一時だぜ。（焉馬に。）おい、もう往かうぢやねえか。

焉　馬。まだ早えやな。もう少し飲んで往かうよ。

蝶　丸。それぢや若旦那も焉馬さんも、私はお先きにご免蒙りますよ。（笑ひながら。）引け過ぎが私どもの稼ぎ時なんですからね。

おせん。（立ち上る。）さやうなら。（焉馬に。）焉馬さん。また吉原で會ふことになるんぢやないんですか。

焉　馬。笑談云つちやいけねえ。

蝶　丸。（立ち上りて。）それぢやご免下さい。

新太郎。
焉　馬。
（同時に。）さやうなら。

（蝶丸とおせんは入口より出でゆく。亭主は女を揺り起す。）

亭主。（女中に。）おい、起きてもう戸を閉めなくちやいけねえぜ。

（女中は澁々目を覺ます。）

焉馬。もう戸を閉めるのか。まだ早えぢやねえか。（徳利を振つて見て。）おい。酒がねえぜ。もう一本熱燗にしてくんねえ。

新太郎。もう止して往かうぢやねえか。

焉馬。なあにまだ早えつてことさ。今夜私は馬鹿に氣持が好いんだから、もう少し飲ましておくんなさいな。（女中に。）おい、もう一本熱いやつを持つて來てくんねえ。

（亭主は人が好ささうに笑ひて、女中に目くばせす。）

新太郎。仕方がねえな。お前も好いけれど醉つ拂ふと直ぐこれだから厭になるよ。

焉馬。（大分醉ひゐる。）何云つてゐやがるんでえ。さあ、お前さんもお飲みよ。（杯を差す。）私は今夜一晩飲み明かすんだから——いけねえや、あの蝶丸のやつ、折角好い氣持になつてゐるところを、すつかり陰氣にしてしまひやがつた。（新太郎を見て。）何でえ。濟ましてゐるねえ。もつと飲めやい。さうしてもつと醉へやい。（徳利を取りて注がむとす。）

新太郎。酒はねえよ。空だよ。

焉馬。（徳利を置きて。）空ぢやあ仕方がねえ。（女中に。）おい、早く酒を持つて來ねえな。

（女中徳利を持ち來る。焉馬は直ちに新太郎の杯に注ぐ。）

新太郎。（笑つて。）ははは、やつぱりかうやつて酒の顔を見ちやあ飲まずにはゐられねえなあ。

焉馬。當り前さ。酒を飲まねえやつなんて、みんな馬鹿でさあ。さあ、かう滅入つちや醉はなくつていけねえ。ねえ、私が歌はあ。ようござんすかい。（口三味線

にて歌ふ。)

裏の土藏のなか、姉やんとつんつらつん、片手に提灯片手に土藏の鍵、しばし待ち下はれ髪を結ふてしまふてね、――

ね、如何です。(調子づきて。)おい、默つてゐずに何かやれやい。

新太郎。おりやあ駄目だつてことよ。

焉馬。だからお前は嫌ひさ。いつでも歌はねえんだもの――それぢやあ私がもうひとつやらあ。如何だい、「辻君」は――(歌ふ。)

「辻君のたへぬ流れの思ひ川、戀にはほそる柳かげ、しばしとめたき三日月の、櫛のむねさへ小夜風に、さらりと解けし洗ひ髪、むすんで清き水の音。

何だか一人で歌つてゐるんぢやあ張り合ひがねえや。

新太郎。おい、もう往かうぜ。何處かで飲み直さうよ。

焉馬。飲み直し――好いね、えいつあ。さあ、出懸けやう。(立ち上らむとして倒れそのまま寢てしまいさうにす。)

新太郎。おい、寢ちやいけねえぜ。

焉馬。(寢たるまま。)寢やあしねえよ。おれはまだこれからうんと飲むんだ。何しろ今夜は句樂の敵討をしてやつたんぢやねえか。畜生――典凌のやつ――ざまあ見やがれ。

(この時入口よりおぎん入り來る。新太郎の情婦、十八九歳位の小柄の女。)

新太郎。(驚きておぎんに。)如何したんでえ、今時分――

おぎん。如何したもかうしたもないわ。兵造さんが醉つ拂つて來て大變なの。(焉馬の方を覗き込む。)だあれ――焉馬さん――

新太郎。うん。

焉馬。(猶寢たるまま呟く。)へつ、馬鹿にしてゐやがらあ、おれを誰だと思つてゐやがるんでえ――日本一の落語家だぞ――ははは――しかし句樂の方がおれよ

りはうまかつたな――だけどあん畜生はもうゐねぇ――あん畜生はもうゐねぇ――

（呟きながら焉馬は寐入る。）

おぎん。ほんとに今夜はどの位捜したか知れやしないわ。

新太郎。（冷かすやうに。）そりやあ如何もご苦勞樣。

おぎん。ほんとに笑談ぢやないわ。さつき兵造さんが醉つ拂つてやつて來て、如何してもあなたを呼んで來いつて云ふんですよ。

新太郎。さうか。そんなにひどく醉つてゐたかい。

おぎん。ええ、まるで正體がなんですもの――そつと寢かして置いて、あなたを捜しに出て來たんだけれど、如何しても見付からないで、ずゐぶん困つたわ。

新太郎。しかしよくここが分つたな。

おぎん。おしんさんの家で聽いたらここを敎へて呉れたの。それから直ぐここへ來て、さつき一度覗いて見たんですけれど見えなかつたわ。

新太郎。さうか。おれはさつきからゐたんだぜ。

おぎん。焉馬さんは寢ちやつたやうね。

新太郎。うん、困つたな。置いて往く譯にはいかないし――

亭　主。なあに好うがすよ。如何にかしますから――

新太郎。さうかい。それぢやお辰さんに賴むかな。（間。）おい、勘定してくんねぇな。

亭　主。へえ、またご一所に頂きませう。

新太郎。それぢあさうして貰はうか。（焉馬を搖り起して見る。）おい、起きろよ、起きろよ。（舌打して。）こいつはなかなか起きさうもねえや。（立ち上りて。）それぢやあ焉馬はよろしく賴むぜ。

（新太郎とおぎんは入口より出でゆく。亭主は暖簾をはづしに外へ出づ。女中も七輪の下の火を消しに往來へ出づ。

二三度續けて屋根より雪の落つる音聽ゆ。焉馬は急に目を覺して起き上る。）

焉馬。（叫ぶ。）さあ、酒だ、酒だ。今夜は一晩飲み明かしだ。何しろ句樂のために弔ひ合戰をやつてやつたんだからな——ああ——何だか今夜は嬉しいやうな悲しいやうな——譯の分らねえ氣持がして仕方がねえ——

（泣くが如くに笑ふ。寂寞の中に焉馬は唯一人崩るるが如く座りゐる。幕。）

第二幕

淺草馬道の煙草屋の二階。六疊と四疊半の二間。

上手は六疊の間の戸棚と壁。正面に窓あり。障子を閉め切る。下手の四疊半の間とは襖にて隔つ。下手に窓あり。同じく障子を閉め切る。階子段は下手にあり。すべて階子段より出入す。

壁に褞袍と烏打帽子を懸く。その下に古ぼけたる茶棚、七輪、土鍋などあり。正面の窓の傍に粗末なる机。その上には古雜誌四五冊載せあるのみ。中央にちやぶ臺、その上には杯、皿などを取り散らす。長火鉢に德利を突き込みたる藥鑵を懸く。

第一幕の翌日の午後一時頃。曇りたる日なれども、折々障子に薄日の當ることあり。

（ちやぶ臺の上手に新太郎座りゐる。新太郎に向ひ合ひて勝兵造座りゐる。本名は樫村虎彦。元は新太郎と同じ大學生。今は狂言作者。二十六七歳位の男。二人は酒を飲みゐる。）

新太郎。（何處か悲しげなれども面白さうに笑ひて。）無賴漢か——成程ね——そりやあ無論無賴漢さ。一體誰がそんなことを云つてゐたんだい。

兵造。誰つて——大抵のやつはさう云つてらあな。

新太郎。さうかね。(棄鉢の調子。)何とても勝手に云やがれだ。へん、おれが如何云ふことを考へてゐるか知らねえんだらう。(間。)今に見ろ——おれの云ひてえことはこれつきりだ。

兵造。(笑つて。)ははは、今に見ろか。一體何をするんだい。

新太郎。何をするかそんなこたあ分らねえやな。しかし何かするよ。(間。)それよりも君は如何して作者部屋へ入るやうな氣になつたんだい。大阪から手紙を貰つた時には、何だかおれは悲しいやうな氣がして堪らなかつたぜ。

兵造。さうだな。如何してと聽かれると困るが——まあ、かい摘んで話せばかう云ふ譯さ。(間。)あれからおれは直ぐ國へ歸つてしまつたぎり、ずつと東京へ出て來なかつたのだが、その間におれはどんなことをしたと思ふ。そりやあずんぶんいろんなことをしたぜ。國へ歸つてから一月も經たないうちに、また家を飛び出して大阪へ往つたのさ。さうして堂島へ往つて相場をやり始めたのを手始めにいろんなことで自分の運試しをやつて見たのさ。

新太郎。(笑つて。)ははは、運試しか——句樂がこんなことを云つてゐたぜ。運なんて石塊見てえなものだつて——何故だつて聽いたら、往來に澤山ころがつてゐるまさあつて云ふのよ。

兵造。まるで謎々だな。(間。)まあ、話さない前からでも分つてゐるだらうが、運試し運試しでやつたことがみんな駄目さ。それでしまひにもうすつかり御沈落のところに、ちよつと知つてゐる人があつたものだから、とどのつまりが狂言作者よ。まだろくすつぽ木も打てやしねえや。

新太郎。しかしその方が洒落れてゐるぢやねえか。何とか云つたな——勝兵造か。

樫村虎彦よりは餘つ程好いぜ。

兵造。さうだな。一生作者部屋で暮らすかな。

新太郎。さうしろよ。好いぜ、洒落れてるぜ。何だが鑄懸松の白のやうだがどんな

ことをして暮らしてもみんな一生よ。おれは焉馬だの何かのしてゐることを見てゐると、つくづくあいつ等が羨ましくなるね。おれもあいつ等のやうな無頼漢で一生を送りてえと思ふが——

兵　造。もう立派な無頼漢ぢやねえか。

新太郎。（頭をかく。）こいつは一言もねえが——しかしまあおれの云ふことを聽いてくれ。おれは無頼漢になるのも好いが、きつと生きてゐられないやうな時が來ると思ふと、それが怖ろしくつて仕方がないのだ。

兵　造。ふん、そんな時が來るかい。

新太郎。おれには如何もさう思はれて仕方がねえんだがね。

兵　造。そんなこたあねえだらう。

新太郎。さうかな。（思ひ出したるやうに。）如何しやがつたらう。おぎんのやつは——ずゐぶん長えお詣りだなあ。（徳利を取り出して。）こいつはいけねえ。お燗が馬鹿につき過ぎちまつたぜ。（兵造の杯につぐ。）

兵　造。（酒を飲んで。）しかしおぎんも變つたな。すつかり世帶染みつちまつたぢやねえか。

新太郎。うん、あいつにも苦勞をさせたからなあ。考へて見りやあ可哀さうな女よ。

兵　造。（しみじみと。）おれもこの一年ばかりの間にいろんなことを知つたが、全く人間つてものは、誰でも可哀さうでねえものは、一人もゐねえやうな氣がするなあ。

（下にて娘が彈く義太夫の三味線の音聽え始む。やがて「薫樹累物語」の土橋の段を語り始む。）

「跡にはひとり歌形姫、怖さひやいさわなわなと、心も空に降る雨は、晴れぬ思ひの稲村に、始終聞くほどせきのぼす。心の角を押しかくし、知らず顔して走り寄り——

兵造。誰だい。

新太郎。ここの娘だよ。君は知つてゐるだらう。始めてここに引つ越して來た晩——

——ほら、君の家の近所に火事のあつた晩さ——あの時君は會つた筈だぜ。

兵造。ああ、あの娘か。あの娘はあの時分清元を習つてゐたね。ほら、紫君に似てゐるお師匠さんの所へ往つてゐたぢやないか。

新太郎。さうさう、延美津の所へ往つてゐたつけな。しかし近頃は義太夫ばかり稽古させてゐるよ。いづれ寄席にでも出す氣なんだらう。

兵造。「累」だなんて變なものをやつてゐるんだな。

（二人は默りて下の義太夫を聽く。）

「ええ腹の立つ腹の立つと、引き廻し引き廻し、引き廻されて歌形姫、多くの人にかしづかれ、敬まはれぬるおん身にも、鄙の旅路をただひとり、さまよひ給ふ憂きなかに、思はぬ難をあはれとも、云ふべき人も遠近の、谺よりほか泣くばかり——

新太郎。おれはこの「累」つてやつが何だか好きだぜこの間何をやらうと云ふから「累」をやれつて云つたのさ。

兵造。何だ。君の入智恵か。しかしおれはこの「累」を聽いてゐると、妙に氣が減入つていけねえよ。（間。）なにね、そいつには少し譯のあることなんだよ。君にはまだ話さなかつたけれど、おりやあ今娘義太夫と一所になつてゐるのだよ。

新太郎。さうか。

兵造。おれはその女が厭で仕樣がねえんだけれど、如何も義理の柵みで仕方なしに一所にゐるのよ。おれが大阪に往つて堂島ですつかりしくじつてしまつてからぶらぶらしてゐるのもつまらねえから、或る師匠の所へ義太夫を習ひに往つたんだ。さうするとそこに内弟子のやうにしてゐる娘がゐたと思ひたまへ。

新太郎。おや、おや、馴れ初め話か。

兵造。さうぢやあねえよ。さうするとね、或る日師匠の留守へ往くと、その娘がたつた一人でゐるのよ。顔はあんまり好かあねえし、別段に何の氣もなかつたんだが、いろいろ話して見るとやつぱり東京のもので、しかも家が瓦町にあつたつて云ふんだらう。いろいろ代地や何かの變つた話をして聽かせると、何だか悲しくなつたと見えて、目に涙をためて聽いてゐるのよ。何だかいぢらしいやうな氣がして、慰めてやつたりなんかしてゐるうちに——

新太郎。かう佐和利澤山ぢやあやり切れねえな。

兵造。まあ到頭一所になるやうになつてしまつたんだがね。その時その娘が「累」を習つてゐやがつたのさ。それだからおれは「累」を聽くと、女の一念つて云ふやうなことを考へて、あんまり好い氣持はしねえのさ。別れやうと思つても別れられず、女にはまるで男の心が分らねえんだから情ねえよ。おれはあの與右衛門の心持がやつと近頃分つたね。

（下の義太夫はなほ續く。）

「とは云ふものの思ひ廻せば二人が因果、わが手に懸けし高尾どのの執着ゆゑ、面體ばかりかそれ足までも、生れもつかぬ不具となり、たとへどのやうに見苦しい顔形になりやつたとて、三婦どの志と云ひ、故郷を離れはるばると、この下總の草の中、仕つけもせぬ百姓業、不自由な世帶も苦にせず、誠盡してたもる心底、心の器量は昔の百倍、これ何の愛想を盡かさうぞいの、とつくり氣を鎭めて聽いてたも、誠絹川が女房の累、本心五體にあるならば、この道理を聽き分けて、姫君の御難義と云ふ、この與右衛門が一しよ懸命の場所、恨を晴らしてともどもに、心便になつてくれと身に迫つたる切なさを、たもちかねたる

男泣——

（二人は思ひ思ひのことを考へつつ義太夫を聽きゐる。長き間。おぎんは階子段を上り來る。）

おぎん。ずゐぶん長かつたでせう。あなた——（新太郎を呼ぶ。）

（新太郎はおぎんと四疊半の方にゆきて話す。直ぐ元のところへ來て座る。おぎんも火鉢の傍に座る。）

新太郎。（獨語のやうに。）駄目か——駄目ぢやあ仕方がねえ。（間。）焉馬の家へ寄つて見たかい。

おぎん。ええ、住つて見るとまだ戸が閉まつたまんまなの。何ほなんでもお午過ぎだのに如何したのかと思つて、戸の隙間から覗いて見ると、焉馬さんが座敷の眞ん中に大の字形に寢てゐるぢやありませんか。

新太郎。如何しやがつたんだらう。

おぎん。私もびつくりしてしまつて。如何したら好いかと思つてゐるところへ、丁度おかみさんがやつて來て、如何も大變な所をお目に懸けて濟みませんつて云ふの。それからいろいろ話を聽いて見ると、昨夜あれから大變だつたんですつてさ。

新太郎。おれも多分さうだらうと思つたよ。

おぎん。歸るといきなり手鍵を出せつて云ふんですつて——何か間違ひでもあつたかと思つたのですけれど仕方なしに出してやると、それを持つたまま外へ飛び出して往つたのださうですよ。さうするとしばらくすると、今度は大變な勢で飛び込んで來て、みんな敲き殺すつて騒ぎなんですつて——不動樣が何たとか云つたもんですから、みんな句樂が乘り移つたと思つて、氣味が惡くつて仕方がなかつたさうですよ。

新太郎。さう云やああの手鍵は句樂のかたみなんだぜ。

おぎん。ああ、さうですつてね。まだもうひとつ句樂さんのかたみの短刀があるんですつて——（間。）手鍵は何處かに預けちまつたが、短刀の方はちよつと預ける所がないから、若旦那の所へ預かつて置いてくれつて、おかみさんが私に渡しましたよ。

（おぎんは立ち上りて風呂敷に包みたる短刀を持ち來る。）

新太郎。さうか。戸棚の中にしまつて置くが好いや。

おぎん。何だか氣味が悪いわね。

（おぎんは短刀を戸棚にしまひ、また元のところに座る。）

兵　造。焉馬はまだ寢てゐるのですかい。

おぎん。いいえ。直ぐ目を覺まして極まりが悪さうな顔をしてゐるんです。自分ぢやまるで知らなかつたんですつて――さうしておかみさんに、濟まねぇ濟まねぇつてあやまつてゐるの。私にもね、どうぞ若旦那によろしく云つておくんなさいつて云つてひどく悄氣てゐましたよ。

兵　造。（笑つて。）ははは、焉馬のやつ相變らずだなあ。

（下の義太夫の三味線止む。）

おぎんは散らかりたるものを片付く。

新太郎は急に机の方へ摺り寄つて、抽斗の中より一冊の汚れたる帳面を取り出す。）

兵　造。何だい、それは――

新太郎。うん、これは句樂の日記だよ、

兵　造。あいつは日記なんぞつけてゐたのかな。狂人になつてからのもあるのかい。

新太郎。うん。狂人になつてからのはなかなか面白いぜ。

兵　造。ちよつと見せないか。

新太郎。これは誰にも見せて呉れるなつて云つてゐたんだが――まあ、待てよ。關はない所だけ讀んで聽かせらあ。始めの方はそれでもまだ分るが、しまひの方になると分らねえことばかりだぜ。しかしその方が句樂らしくつて面白いよ。（日記を開きて。）ええと、こいつは何時かな――一昨年の夏だ。八月の四日――（日記の文句を讀む。）「焉公がやつて來る。寄席の賣り物が東京に四十八軒ある由。買

ひたい寄席は一軒もなし。焉公おれをほめて氣の利いたやつだと云ふ。何故だと聞けば席へ出ぬからと云ふ。うれしくなりて酒を買ふ。」なあ、おい、こんな所を讀むと何だかあいつに會つてゐるやうな氣がするぢやあねえか。

兵　造。さうだな。それから——

新太郎。（二三枚開けて。）これは八月の二十一日のやつだ。（讀む。）「ちきり伊勢屋に借した金のあるのを思ひ出す。請人は白井左近だつた。今日は一日その金のことばかり考へる。二三日前傳法院横町で買つて來た三世相の本をしらべて見たが、如何しても證文のありかが分らない。蝮の吉兵衛さんが知つてゐるかも知れない。」またここにも蝮の吉兵衛が出てゐるぜ。ええと——九月一日の所を讀んで見よう。何だか細かい字で一杯書いてあるぜ。（また二三枚開けて讀む。）「不意に夜中におれを起すものがある。びつくりして目を覺ますと紫君がゐる。おいお前は死んだつて云ふぢやねえかつて云ふと、返事もしずに泣いてゐる。何だか悲しくなつて泣く。しばらくするとおれは紫君と一所に眞つ暗な道を歩いてゐる。雨が降つてゐて二人ともびしよ濡れ。向ふから傘をさした人が來るが誰だか分らない。見るとその傘には村井長庵巧破傘と勘亭流で書いてある。何時までたつても夜が明けない。ふられてかへる裏田圃。あばよだ。」（笑ふ。）こいつは面白れえや。

兵　造。何だか夢見てえだな。そこいら邊はもうそろそろ怪しくなつて來た時分なんだね。狂人になつてからはどんなことを書いてゐるんだい。

新太郎。さうだな。（二三十枚飛ばして開く。）ここは十二月の七日だが——（默つて讀む。）これは病院にゐる時のらしいや。（字が分らずに考へながら讀む。）「今日は深川の不動樣の境内にて無賴漢の寄り合ある由焉馬より葉書來る。拙者も出席すると、小しんも、焉馬も、典凌も、潮枝も、手品の桂一も、獨樂の蝶齋も、みんなゐる。おれを議長にすると云つて、みんなで石燈籠の上に乘つける。ふいと傍を見ると石に吉原と彫つてある。紫君のことを思ひ出して何だかうれしい。

これからみんなで連座を始める。道行や句樂紫君の春の雨と云ふ句を桂一がよむ。拙者大に頂戴する。典凌が怒り出したのでみんなで敲つてしまふ。馬鹿なやつ紫君に惚れる櫻かなつて句をおれがよむ。これは自分のことにあらず、典凌のことなり。敵討が始まつて、おれは一時に五十本の槍をつかふ。好い氣持だ。」何だか譯が分らねえや。もう止さう。讀みくたびれつちまつたから——

「おぎんはこの間にちやぶ臺を片付け、杯などを洗ひ置く。おはつ階子段を上り來る。煙草屋の娘。十六七歳位。）

おはつ。おぎんさん、ちよつと——

おぎん。え、誰か來たの。

おはつ。いいえ。

（おぎんは階子段の所へ行く。おはつはおぎんに何ごとか呼く。）

新太郎。（心配さうに。）何だい。

おぎん。いいえ、何でもないの。（おはつに。）ええ、それではようございます。如何もお氣の毒さま。

（おはつは階子段を下りてゆく。）

新太郎。如何したんだい。

おぎん。（兵造を憚るやうに。）あのね。酒屋で寄越して呉れないんですつて——

新太郎。仕樣がねえな。（徳利を振つて見て。）もうありやしねえ。

おぎん。（戸棚より貧乏徳利を出す。）まだここに少しは殘つてゐるわ。今日はこれで我慢なさいよ。

（おぎんは酒の燗をつけつつ、火鉢に寄りて何ごとか考へゐる。窓の下にて「若旦那、新太郎少將、遠山の金ちやん、如何したい、家ですかい」と續けさまに叫ぶ聲聽ゆ。

新太郎は障子を開けて下を見る。向ふ側の屋根の上に物干など見ゆ。）

新太郎。やあ、珍らしいぢやねえか。上らねえか。

兵　造。誰だい。（立ち上つて下を見る。）やあ、小しんか。

小しんの聲。（下より。）今日はちよつとしかお邪魔が出來ねえんです。實は急に考へ付いたことがあつてね。

新太郎。まあ、話は上つてからにしろよ。

（やや長き間。小しんは車夫に背負はれて階子段を上り來る。落語家。盲目にして蹇。三十一二歳。火鉢の傍に座る。車夫は直ぐ下りてゆく。）

新太郎。何だい、その急に考へ付いたことつて云ふのは——

小しん。なにね、今日はひつと句樂忌つてやつをやらうと思つて、方々無賴漢を狩り集めて歩いてゐるんでさあ。それに私の家ぢやあ面白くねえから、焉馬の家でやらうつて趣向なんですがね。

新太郎。焉馬の家は大變だぜ。

小しん。そんなことはとうに承知さ。如何です。若旦那は來て呉れますかい。

新太郎。往くとも。それにもう一人無賴漢を連れて往かあ。（兵造に。）ね、好いだらう。

兵　造。（小しんに。）小しんさん。しばらくだね。

小しん。（よく分らず。）どなたでしたかな。

兵　造。樫村だよ。

新太郎。今は樫村つて云ふんぢやねえんだぜ。勝兵造つて狂言作者さ。

小しん。久しくお目に懸りませんな。へえ、狂言作者に——變れば變るものですなあ。

（間。）どうぞ來て下さいな。あなたもまんざら句樂と知らねえ仲ぢやあねえんだから。（新太郎に。）それにね、若旦那。ここの家のおはつさんに來て貰ひてえんですが如何でせう。

新太郎。如何しようつてえんだい。いやに色つぽい句樂忌だなあ。

小しん。實は私が義太夫を語らうつてえんでさあ。「紫天神水差問答」の八つ目句樂狂亂の段と云ふやつなんです。小しん新作だから凄うがせう。

新太郎。（笑ふ。）はははは、こいつは面白れえや。（おぎんに。）おい、おはつさんになつちよつと來て下さいつて。

（おぎんは階子段を下りてゆく。直ぐおはつと一所に上り來る。）

おはつ。なあに。何か用なの。

新太郎。あなたに是非頼みてえことがあるんだが聽いて呉れますか。

おはつ。なに、笑談ぢやないの。

小しん。如何して笑談なんぞぢやありやしません。今夜ちよつとあなたの三味線を拜借したいんだが如何でせう。

おはつ。ええ、好いわ。何するの。

小しん。さう、安承合ぢやあ心配だな。まあ、好うがす。それぢやあお願ひ申しますぜ。

新太郎。（おはつに。）まあ、そんな所に立つてゐずにこつちにお出でなさいよ。

おはつ。（ちやぶ臺の傍に座る。）一體何なの、今夜は。

新太郎。何でもないんだよ。私と一所に來て呉れりやあ好いのさ。

おはつ。いやあよ、惡戯をしちやあ。

新太郎。大丈夫だよ。

おはつ。ねえ、おぎんさん、この間なんかずゐぶんひどいわね。焉馬さんと二人で方々引つ張り廻した揚句、龜井戸の太鼓橋の傍でまいてしまつたりなんかして——

——

新太郎。ありやあ焉馬が惡いんだよ。

おはつ。嘘よ。あなたが先に見えなくなつちまつたんだわ。

新太郎。おや、いやに焉馬の肩を持つね。焉馬もおはつさんのことをほめてゐたぜ。

あんな可哀らしい娘はないつて。おはつさんもまんざらぢやあねえんだらう。

おはつ。厭だわ。あんな醉つ拂ひ——

小しん。おや、おや。（新太郎に。）それぢやあ私は失禮しますよ。これから焉馬の所へ往かなくちやあならねんだから。（おぎんに。）おぎんさん、濟みませんがちよつと車夫を呼んで下さいな。

新太郎。好いよ。おれが負つて往つてやらあ。（立つて小しんの傍に來る。）さあ、好いよ。（小しんを背負つて。）しつかりつかまつてゐなくつちやいけねえぜ。

小しん。如何も濟みませんな。（皆に。）それぢやあ皆さん。　さやうなら。

「皆「左樣なら」と云ふ。新太郎は小しんを背負ひて階子段を下りてゆく。おはつとおぎんは續きて階子段を下りてゆく。

やや長き間。

下にてまた「左樣なら」と云ふ聲聽ゆ。兵造も窓より首を出して「左樣なら」と云ふ。

新太郎とおぎんは階子段を上り來る。）

兵　造。おれは兎に角ちよつと家へ往つて來らあ。

新太郎。家つて何處だい。

兵　造。まあもう少し聽かずに置いてくれないか。

新太郎。うまくやつてゐやがるな。今夜は焉馬の所へ往くかい。

兵　造。うん、往つても好い。しかしおれは少し晩くなるぜ。

新太郎。晩くつても好いから往つて見ろよ。家はやつぱり前の所だよ。

兵　造。さうか。（帽子を取りて立ち上る。）それぢやあさやうなら。

新太郎。さやうなら。

（兵造は階子段を下りてゆく。おぎんは見送りに立つ。

新太郎は雜誌を枕にして横になる。悲しげに目を閉づ。

おぎんは階子段を上り來て、新太郎の姿を見、胸ふさがる心持。
往來より樂隊の音に續いて、化粧水の廣告云ひの聲聽え來る。次第々々に遠ざかりゆく。）

新太郎。（かすかに目を開きて）。おぎん。

おぎん。ええ。

新太郎。（ものうげに。）おりやもう何をするのも厭になつてしまつたぜ。何だか死にてえや。

（おぎんは返事に困りて默りゐる。）

新太郎。（悲しげに。）なあ、おぎん——

おぎん。（心細さうに。）なに。

新太郎。お前にも苦勞させたなあ。ここに來てからと云ふものは、おちおち寢させたこともねえ位だつたな、あれからもう一年になるが、おれは如何も一生うだつが上りさうもねえよ。こんな汚ねえ二階に何時まで燻つてゐなくちやあならねえこつたか——

おぎん。二人でゐりやあどんな所でも好いつて云ふので、この二階を借りたのぢやありませんか。（情なさうに首を振つて。）もうそんなことは云はないで下さい。ね、もうこれからはお酒もあんまり飲まないで、えらくなるやうに勉强して下さいよ。

新太郎。（絕望の調子にて。）もう駄目だよ。もういくら藻掻いたつて如何したつて追つ着きやあしねえ。一生かうやつて無賴漢で押し通すか、それでなけりやあ死んぢまふか、このふたつのなかのどつちか一つだ。樫村のやうに狂言作者にもなれず、小しんや焉馬のやうに落語家にもなれず、かうやつてぶらぶらしてゐるだけに、生きてゐるのが苦しいよ。

おぎん。（涙ぐみて。）もうほんとにそんなことは云はないで下さいな。何だか私が

あなたをこんなにしてしまつたやうで――（歔欷をしながら。）私だつてどんなに辛いか知れやしないけれど、みんなあなたの爲めだと思つて辛抱してゐるのだわ。あなたも私のことを思つて呉れるのなら、どうぞもう少し――（泣く。）

新太郎。（目を閉ぢて向ふを向く。）もうこうなつちやあ仕方がねえやな。

（下にてはおはつはまた三味線を彈く。「傾城戀飛脚」の新口村の段を語る。）

「落人のためかや今や冬枯れて、薄尾花はなけれども、世を忍ぶ身の後や先、人目を包む頬かぶり、隱せど色香梅川が、馴れぬ旅路を忠兵衛が、いたわる身さへ雪風に、凝る手先懐に、温められつ温めつ、石原道を足曳の大和はここぞ故郷の、新口村に着きにける。」

（おぎんは疊の上に俯伏したるまま泣きゐる。新太郎も横になりたるまま身を顫はせて泣きゐる。義夫太はなほ續く。）

おぎん。（顔を上げて。）ねえ、あなた――

（新太郎は默りゐる。）

おぎん。（悲しげに。）かうやつてゐて二人は今に如何なるんでせうねえ。

新太郎。（向ふを向きたるまま。）如何なるか分るもんか。いづれしまひには死んぢまふのよ。（獨語のやうに。）ここの二階は句樂が世話をして呉れたのだが――あいつもあれから直き死んぢまひやがつたな。あいつが生きてゐて呉れりやおれ達だつて、こんなに情ねえことなんぞ考へやしなかつたんだらうがなあ。

おぎん。（しみじみと。）ほんとにあの時分はさうも思はなかつたけれど、今になつて見るとあの人でも生きてゐたらと思ふわねえ。

新太郎。（おぎんの方を向きて棄鉢に。）仕方がねえや。くよくよしてゐたつて如何なるものか。

おぎん。でも――（また泣く。）

新太郎。何でえ。泣くねえ、泣くねえ、泣いたつて仕方がねえ。いよいよいけなく

なつたら二人で心中するばかりよ。

おぎん。（眞面目になりて。）ほんとに心中して呉れて――今直ぐでも――

新太郎。今か――（考へて。）いけねえ、いけねえ。まだ心中するのには早過ぎらあ。

（二人は顔を見合せて寂しげに笑ふ。義太夫の三味線の音ものうげに響く。幕。）

第三幕

深川の八幡宮の傍の焉馬の家。

湯屋の裏の路次の奥。上手に寄りて焉馬の家あり。八疊の一間。上手に床の間と壁。床の間に句樂の寫眞を飾り、その前に線香を立つ。壁には役者の似顔繪芝居の番附などを貼り付く。三味線一挺懸りゐる。正面に窓あり。窓の向ふは湯屋の裏手の煉瓦塀となる。正面下手寄りに障子。その奥は臺所に通ず。箪笥、枕屏風。長火鉢などあり。下手正面に向つて格子戸。鈴を附けあり。下手の路次の中程、焉馬の家に近く軒燈あり。「金烏亭焉馬」とまづき勘亭流にてしるしあり。下手に近所の長屋の板壁。路次の蔭にはなほ残りたる雪あり。座敷にはちやぶ臺を置き、そのあたりにいろいろのものを取り散らしあり。

第二幕と同じ日の夜の七時頃。

（焉馬、小しん、新太郎、おはつ、おくめ、おかくの六人、ちやぶ臺を圍みて座りゐる。おくめは焉馬の女房。三十一二歳位。おかくは下座の女。三十歳位。）

おかく。（焉馬に。）馬鹿にしてゐやがるね。誰がお前さんなんぞに惚れるものかね。

焉　馬。嘘吐くない。こん畜生。この間の晩さう云つたぢやねえか。（おくめに。）

なあ、おくめ。

おくめ。何を云つてるんだい。女房にそんなことを聽くやつがあるものかね。お前さん、その杯を若旦那にお返しな。

馬　馬。おつとすつかり忘れて如何も濟みません。へい、若旦那。（杯を差す。）ねえ、折角無賴漢がこれだけ集つたんだから、何かして遊ばうぢやあねえか。

小しん。（考へて。）さうさな。句樂忌つて云ふんだから、何か面白れえ趣向をしてえな。

新太郎。如何だい。小しんさん。まださつきの話のやつは早いのかね。

小しん。（笑つて。）まだいけないね。あれにやあまくらを振らなくちやあ面白くねえんですよ。

馬　馬。兎に角もう少し杯を動かさうぢやねえか。（おはつに。）ねえ、おはつさん。あなたも少し飲んだら好いでせう。（杯を差して。）何しろ私はね、あなたにぞつこん惚れ込んでゐるんですぜ。この間も私は小しんに云つたんだ。あんな可哀らしい娘さんはないつて——（三味線を彈く手眞似をして。）如何です、べんぺんの方は。今何をやつてゐるんですね。

おはつ。變なものなんですよ。「累」の土橋をやつてゐるの。

馬　馬。ああ、「累」を——（節をつけて云ふ。）「誠絹川の女房の累、本心五體にあるならば」つてね。ちよつと好うがすね。

新太郎。馬馬さん。何でもよく知つてゐるね。

馬　馬。そりやあ知つてゐるまさあね。これだつて藝人でさあ。この近所の娘つ子はみんな振り返つて見ますぜ。（女の聲色にて。）あら、あすこに往くのは馬馬さんよなんて云つてね。

小しん。厭なやつだな、こいつは——止せやい。氣味の惡い聲を出しやがつて——女子供はおびえらあな。

馬　馬。さうお前見てえに邪見に云はなくつても好いぢやねえか。（短き間。皆思ひ出したるやうに酒を飲む。）

おくめ。何だか今夜はずゐぶん靜かな晩だね。

おかく。騷々しいのはここばかりさ。

馬　馬。好いぢやねえか。騷々しくつたつて——（突然新太郎に。）ねえ、さうでせう。時にあの人は來るんですかい。元の名前は樫村さん、今は何とか云つたな。

小しん。勝兵造よ。

馬　馬。ああ、さうさう、勝兵造——あんまり好い名ぢやあなささうだな。やつぱり河竹默阿彌の方がえらいんでせう。

新太郎。極つててらあな。しかし名前なんて何だつて好いぢやねえか。藝さへ好けりや好いやね。句樂なんて名はあんまり好い名ぢやねえんだらう。

馬　馬。ああ、句樂つて云やあ、あなたの所へあいつのかたみの短刀をお預けしたんですつてね。

新太郎。ああ。

小しん。あいつは夜店で二分の品なんですぜ。それを青井下阪だなんて云つて、大事にしまつて置きやがつたんでさあ。

新太郎。手鍵は何處へ預けたんだい。昨夜お前が振り廻したつてやつさ。

馬　馬。いや、もう昨夜のことは云つこなしさ。私はあすこから如何して家へ歸つたか分らねえんですぜ。いや、もう大しくじり。今朝おぎんさんに會つた時なんぞは、全く穴へでも入りたかつたね。

小しん。この男は醉つてゐねえ時いつもこれだから可哀いいのさ。

馬　馬。（少してれて。）もうそんな話は好いや。かうやつてゐてもつまらねえぢやねえか。都々逸でも歌はうか。（おかくに。）ねえ、おかくさん。お前三味線を彈いてお呉れよ。

おかく。ああ、三味線彈くのは商賣だから仕方がないや。しかし都々逸ぢやあ役不足だね。

馬　馬。何でえ、こん畜生。いつも下座で彈いてゐやがる癖に、ご大相なことを吐

かしやがらあ。（調子を變へて新太郎に。）だけどね。下座を彈かせて置くのには惜しい器量でせう。

おかく。何だい。人を馬鹿にしてゐるよ。

（おかくは立ちて壁に懸けたる三味線を下す。小しんは何ごとか考へゐる。）

新太郎。ねえ、小しんさん。

小しん。（顏を上げて。）ええ。

新太郎。君の目は如何しても駄目かねえ。

小しん。（あきらめたるやうに。）ええ、如何も駄目のやうですねえ。まあ仕方がありませんや。何ごとも因緣づくや別れ霜でね。

新太郎。おい、それは誰の句だい。

小しん。（笑つて。）あなたがさう聽くだらうと思つて待つてゐたのさ。これは私の句さ。しかも今ちよいと作つたのさ。名句でせう。

新太郎。何だ。發句を考へてゐたのか。

小しん。もうひとつあるんですよ。水差がものを云ふ夜半の寒さかな——こいつは句樂の句でなくちや面白くねえな。

新太郎。ああ、何か——枕元の水差と話をしたつてやつだな。あの話ももう昔話になつちまつたなあ。

（馬馬は急にはしやぎ出す。）

馬　馬。好いかい。おかくさん。發句なんて面白くもねえ。景氣よく都々逸でもやらうぢやねえ。

（馬馬歌ふ。おかく三味線を彈く。）

「玉だれのうちぞゆかしきあの御所車、戀にへだてがあるものか。」

小しん。よお、よお。もうひとつ何かやつてくんねえ。

馬　馬。如何だえ、こんなのは——（歌ふ。）

「江戸の夜鷹は難波の惣嫁、添はぬながらも一夜妻。」

小しん。いやな都々逸だな。

焉馬。（きよとりとして。）さうかな。

おはつ。焉馬さんは好い聲だわねえ。

小しん。おや、うまくやつてゐやがるな。

焉馬。難有てえ。私はおはつさんにさへ聽いて貰へばそれで好いのさ。あいつ等に何が分るものですか。

小しん。何を云つてゐやがるんでえ。まあ、待ちな。今にどえれえものを聽かせてやるから——

焉馬。ああ、何だかもうひとつ歌ひたくなつて來たね。おかくさん、賴むぜ。

新太郎。おや、おや、何たか都々逸に醉つ拂ひさうだぜ。

焉馬。ねえ、おはつさん。あなた聽いて下さいよ。みんな嫉妬を燒いてゐるので

すから——

おはつ。（笑つて。）ええ、聽くわ。

焉馬。（勢づいて。）さあ、ひとつ——（歌ふ。）

「人の戀路を邪魔するやつは。鰒にあたつて死ねば好い。」

如何です。みんなあいつ等はその組でせう。

おくめ。何だい。お前さん一人ではしやいでゐるんだね。もうお止しよ。

焉馬。おや、おや、勤め甲斐のねえお座敷だなあ。

（皆また盛んに酒を飲む。）

兵造路次の奥より出で、格子戸を開けて中に入る。）

兵造。今晩は——

焉馬。何とか云つたな——ああ、兵造さんですかい。どうぞお上んなさい。

兵造。それぢやあご免なさい。

（兵造は座敷に來る。おくめ、おかくなどと挨拶す。ちやぶ臺の傍に座る。）

馮　馬。（直ぐ杯を兵造に差す。）如何です。一杯――

兵　造。馮馬さんの所も相變らずだなあ。ここの路次を曲ると、もう酒の匂ひがぷんとするぜ。

馮　馬。まさか――しかしみんな酒が生命なんだからね。何しろ酒を飲んで生きてゐる輩なんだから堪らねえよ。お前さんだつてやつぱりその仲間ぢやあねえか。

小しん。だけど兵造さん――もうこれからは兵造さんて云ひますぜ――あなたは好い所へ入りましたね。芝居の中とは考へたよ。いくら土百姓や足輕が威張つてゐる世の中だつて、あすこの中だけはまた別でさあね。

新太郎。そりやさうだな。あすこは無頼漢達のお寺見てえなものだからなあ。云はば靈魂の捨て所よ。

兵　造。差しあたりおれは坊主の役か。（笑ふ。）

小しん。（呟くやうに。）世の中が――全く考へて見りやあこんな馬鹿々々しい所はねえやね。（新太郎に。）しかし、若旦那。私はかなり運の好い男さ。つくづく世の中に愛想が盡きた時、丁度好い鹽梅に盲目になつたんですからね。これで盲目になつてゐなかつたら、きつと句樂見てえに狂人になつて死ぬ位が落かも知れねえ。

新太郎。全く句樂が狂人になつたのも、無理はねえと思ふね。まあ考へて見ねえ。早えところが今の世の中に死ぬほど女に惚れるやつがあるかい。まあねえと云つても好いだらうぜ。

小しん。さうですかね。そんなこたあねえでせう。

新太郎。そりやあしかし千人に一人あるかなしだぜ。しかし死ぬほど女に惚れることの出來るやつは仕合せさ。おれなんかには如何してもそれが出來ねえんだから情ねえよ。

小しん。若旦那なんざあさうでもありますまい。何しろ家にぢつとしてゐりやあ立派に若旦那でゐられるものを、ああやつて煙草屋の二階に二人で燻ぶつてゐるなんざあ、惚れなくつちや出來ねえ仕事ですぜ。

新太郎。さう云はれりやあ一言もねえが、おれは女と一所にゐるのが嬉しくつて、家を飛び出したんぢやあねえぜ。

小しん。へえ、それぢやあ如何云ふ譯でなんですね。

新太郎。（悲しげなれども强く。）無賴漢になりたくつてさ。

（女房は驚きて新太郎の顏を見る。短き間。）

馬　馬。（杯を新太郎に差す。）それでこそあなただ。まあ、一杯差し上げませう。

小しん。（考へて。）無賴漢に――成程――

新太郎。（感傷的になつて。）ねえ、小しんさん。お前さんにだけはおれの心持が分るだらう。つまり世の中から見離されてえのさ。見離されて自分一人になりてえのさ。（うるみたる聲にて。）さうして寂しく一生を送りてえのさ。おれはならうことならまるで世の中のことなんか見たくねえのさ。そこにゆくとお前さんは羨ましいよ。おれは狂人になつた句樂も羨ましければ、盲目になつたお前さんも羨ましいよ。そりやあ句樂のことを考へれば可哀さうだとも思ふし、またお前さんのことを考へれば氣の毒だとも思ふ。しかしよくよく考へて見ると、一番可哀さうで氣の毒なのは自分だね。

小しん。（ほろりとして。）誰しも悲しい世の中なんですかねえ。

新太郎。（慰めるやうに。）それだからね、小しんさん。お前さんがいくら盲目だつて云つても氣を落さないで、厭な世の中のことを見ねえで好いと思つてゐるが好いよ。

小しん。ええ、私はもう疾うからさう思つてゐるんですがね――しかしこれで時々昔のやうに目が見えたらと思ふことがありますよ。

兵造。そりやあさうだらうね。

小しん。世の中のことはあきらめやう一つだが――さてこのあきらめつてやつが哀れなものでね。

馬馬。（呑氣さうに。）時世時節とあきらめしやんせか。

新太郎。おい、まぜつ返しちやいけねえぜ。

（間。小しんは急に何かたくらむ如き微笑を洩らす。）

小しん。（新太郎に。）ねえ、若旦那。私は句樂が死んでから何だか急に寂しくなつたやうな氣がして仕方がねえんですよ。今夜は句樂忌つて云ふんだから、すこし句樂のことをお話しますがね。これは誰も知らねえことなんですぜ。人情話だからよく聽いて下さい。（兵造に。）如何です。この話なんか芝居でやつてもちよつと泣かせますぜ。

兵造。一體如何云ふ筋なんだい。

小しん。（しんみりと話し出す。）さうさ。あれは句樂が狂人になる少し前のことでしたよ。私はもうそろそろ目が悪くなつてゐて、みんなから醫者に懸れつて云はれるのを厭だ厭だで押し通してゐる時分のことなんです。まだ夏の眞つ盛りでいやに蒸し暑い晩のことでした。私はその二三日前から加減が悪くつて、席を休んでぶらぶらしてゐたんですが、句樂はもうその三日も前から、まるつきり席へ出ずに遊んでゐるんです。さうしてその云ひ草が好いぢやありませんか。箆棒め、働いたつて死ぬやつは死ぬんで、遊んでゐたつて生きてゐるやつは生きてゐるんだ――とかうでさ。（間。）さうでしたね。晩の十一時頃でしたかな。私がもう寢てしまつたところへ、句樂がしよんぼり入つて來たから、おい、如何したんだいつて、床の中から聲を懸けると、うんと云つたきり長火鉢の前に座り込んで、默つて何か考へてゐる樣子なんです。何だかいつもの句樂とは違つてゐるやうだから起きて往つて見ると、あいつは私の顏を見るといきなり、おい濟まねえが酒を

一杯くんねえ、冷の方が好いやつて云ふんです。何でも餘つ程苦しいことか何かあるんだが、酒をあほらうにも錢がねえて譯らしいのです。暫らくの間默つて酒を飲んてゐましたが、そのうちまあ聽いてくんねえと云つて話し出したのが、かう云ふ話なんです。

馮　馬。おい、手つ取り早くやつてくんねえな。醉が覺めつちまはあ。

小しん。句樂は紫君にも惚れてゐたんですけれど、外にもう一人惚れてゐた女があるんです。それは横濱の淫賣婦のお蔦つて女で、落語家には誰でも惚れるつてやつなんでさあ。若旦那、知つてゐるでせう。

新太郎。ああ。お蔦なら知つてゐるよ、句樂の家で二三度會つたから——

小しん。あの女は句樂が引つ懸るまでにも、何人落語家にかかり合つてゐるか知れやしません。喬枝さんや金藏さんなんてところまであの女に引つ懸つたんだからをかしいやね。そいつが如何したものだか、句樂の方からも惚れれば、お蔦の方でもまん更でもねえつてことになつたんです。それでお蔦もしまひには句樂の家へ來て面倒を見たりなんかしてゐましたが、さう云ふ工合で紫君の方へは自然足が遠くなつてゐたものと見えるんですね。さうまで惚れ合つてゐるものなら、お蔦もちやんと句樂の世話をしてやれば好いのに、それが何時の間にかどろんを極めてしまつたものと見えますね。それもまた無理はねえんでさあ。二月も三月も席を休んでゐるんですから、米を買ふ錢だつてねえんでせう。もともと淫賣婦のことだからさうは辛抱が出來ねえやね。（間。）さあ、お蔦がゐなくなると、句樂はまた紫君のことを思ひ出して、矢も楯もたまらなく會ひに往つたのが、私の家へやつて來た前の晩のことなんです。

（この話の間に馮馬はおはつにからかふ。）

馮　馬。ねえ、おはつさん。あんな話はつまらねえでせう。さあ、もつとこつちへお寄んなさいよ。

おはつ。厭だわ。黙つて聽いていらつしやいよ。

馬　馬。おや、おや、さう邪見こするもんぢやありませんよ。（おはつの膝を突く。）

おはつ。おお、痛い。何をするの、馬さん。

（この時丁度小しんの「前の晩のことなんです」と同時になる。）

小しん。うるせえな。靜かにしねえな。

新太郎。（笑つて。）馬はのやつはたしかにおはつさんに惚れてゐるぜ。

小しん。まあ、聽いて下せえな。これからが話してえところなんだから——（間。）

さうして句樂はその前の晩にふらりと紫君に會ひに出懸けたんださうです。この前から病氣だつて話は聽てゐたんださうですが、もう好くなつたつて話をその二三日前に典凌が來て話したんださうです。そこでお蔦には逃げられるし、しみじみ紫君が戀しくなつて、酷工面で金をこしらへて、さて往つて見ると、如何ですか——紫君は昨夜死んぢまつたつて云ふぢやありませんか。それを聽いた時に句樂のやつ、ぼろぼろ涙をこぼして泣いたさうですよ。さうでせう。あいつは紫君にはずゐぶん惚れてゐましたからね。紫君のところへ往かなくなつたのも、厭で往かなくなつたんぢやねえんですからね。あいつはあれで、氣の弱い男で、きつと世話をしてくれるお蔦に義理を立てて、それで往かなかつたのに違えねえんでさあ。それからまあその晩はそこで遊んで、みんなといろいろ紫君の話をして、酒もろくに飲まねえで夜を明かしたんださうです。さうなると人情で何につけても紫君を思ひ出しまさあ。何だかそこの家を出るのが厭で、その翌る日も一日ぶん流して、さうしてその歸りに私の家へやつて來たんです。

新太郎。それからまた大分愁歎があつたんだね。

小しん。ええ、いろんな話をしてゐましたよ。お前と一所に往つた時にこんなことがあつたとか何とか云つてね——酒を飲んぢやあ泣いてゐるのさ。さうしてさんざ泣いた揚句、それぢやあまた來らあつて云つて、しよんぼり歸つて往きました